彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

―― 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 ――

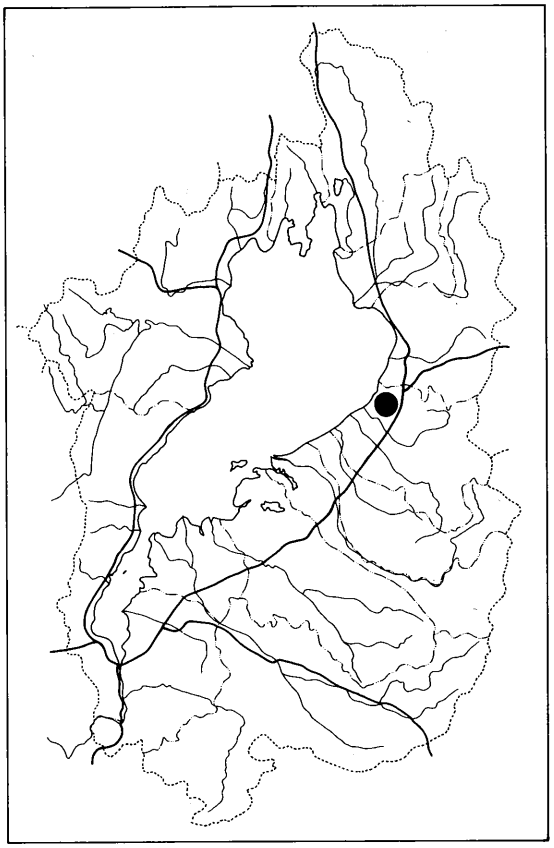
1985

彦 根 市 教 育 委 員 会

彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

―― 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 ――



1985

彦根市教育委員会

序

彦根は、古来より都と東国・北国などを結ぶ要衝の地として、幾多の政争の舞台となりました。近世に入っても徳川幕府はこの地を重視し、徳川譜代筆頭の井伊直政を封じ、以降廃藩置県に至るまで井伊家が彦根藩を領してきました。その治世を通じて、彦根城を中心とする城下町が形成されました。城下町の主要部は、現在、特別史跡彦根城跡に指定されています。その地中には、近世彦根藩の歴史が数多く埋もれていることでしょう。

従来、埋蔵文化財の発掘調査といえば有史以前と考えがちでしたが、昨今では中・近世の調査が文献資料を補う形で急速に増加し、新知見をもたらしております。彦根市内においても例外ではなく、本書も又、そうした成果の一端を収めたものです。今回の調査は、特別史跡彦根城跡の一隅に位置する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に先達って実施しました。調査域が旧校舎の建っていた位置にあたるため、遺構の残り具合は余り良好とは言えなかったが、それでも近世武家屋敷の様相を知る幾つかの貴重な資料を得ることができました。本書が、研究者のみならず多くの方々に活用され、埋蔵文化財および近世史に対する理解が更に深められるよう願うものであります。

最後に、この調査にあたり、多大な協力を賜った関係者のみなさんに対し、心から感謝の意を表します。

昭和６１年３月

彦根市教育委員会

教育長　河　原　保　男

例　　言

1．本書は、特別史跡彦根城跡内に所在する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に伴って実施した発掘調査の成果を収めたものである。

2．本調査は、彦根市教育委員会社会教育課が実施した。

3．現地調査および整理・報告書の作成は、社会教育課技術吏員・谷口　徹が担当した。

4．調査・整理には、調査協力員・桂田峰男氏（現山東町教育委員会）の協力を得たほか、原弥助・立岩義一・久米正雄・辻森敏雄・北川正吉・久米たつ枝・寺村千紗子・大堤須美子・森うた・円城伸彦・沢田具高・鵜野浩司・田中養次・林孝好・長野忠義・黒田昌宏・植野克志・吉岡俊幸・安田正利・伏木和子・川村和枝の諸氏が参加した。又、遺物の保存処理については滋賀県埋蔵文化財センター中川正人氏を、遺物写真については寿福　滋氏をそれぞれ煩した。記して感謝の意を表したい。

5．本書の執筆・製図等は谷口が行ない、付章については近江八幡市立郷土資料館・江南　洋および（財）滋賀県文化財保護協会・近藤　滋の両氏にお願いした。

目　　次

序 …… 1

例　言

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．歴史的環境 …… 5

Ⅲ．検出遺構 …… 6

Ⅳ．出土遺物 …… 17

Ⅴ．考　察 …… 21

付　章 …… 29

挿　　図

図１．調査位置図 …… 1
図２．彦根城第１郭・第２郭復原図 …… 2・3
図３．現況地図に「御城下惣絵図」の屋敷割りを加えた地図 …… 4
図４．調査トレンチ設定図 …… 5
図５．特別教室棟区遺構全図 …… 7
図６．土塁断面図 …… 8
図７．管理棟区遺構全図 …… 11
図８．井戸・便槽等実測図 …… 13
図９．漆喰池実測図 …… 15
図10．出土木製品実測図 …… 19
図11．彦根城表御殿跡（部分）坪庭位置図 …… 23
図12．ＥＸ．３漆喰池実測図 …… 24
図13．ＥＸ．４漆喰池実測図 …… 25
図14．ＥＸ．５漆喰池実測図 …… 26
図15．付章関係遺構全図 …… 30
写真１．ＳＫ０８出土の漆埦 …… 14
写真２．市内現存の武家屋敷内坪庭漆喰池 …… 27

図　　版

ＰＬ．１　遺構．１．特別教室棟区全景　２．管理棟区全景
ＰＬ．２　遺構．１．ＳＤ０３　２．ＳＤ０４
ＰＬ．３　遺構．１．ＳＥ０１　２．ＳＥ０２
ＰＬ．４　遺構．１．ＳＥ０３　２．ＳＬ０１
ＰＬ．５　遺構．１・２．ＳＸ０１　３．ＳＸ０３
ＰＬ．６　遺構．１．ＳＸ０２　２．ＳＸ０４　３．ＳＰ０１　４．ＳＰ０２
ＰＬ．７　遺物．Ｐ０１～Ｐ０４、Ｅ０１
ＰＬ．８　遺物．Ｐ０５～Ｐ０７、Ｐ１０
ＰＬ．９　遺物．Ｐ０８・Ｐ０９、Ｅ０２、Ｗ０１～Ｗ０３、Ｗ０５
ＰＬ．10　遺物．Ｐ１１・Ｐ１２、Ｗ０４、Ｗ０６
ＰＬ．11　遺物．Ｐ１３～Ｐ１５、Ｗ０７
ＰＬ．12　遺物．ＰＷ０１・ＰＷ０２

Ⅰ．はじめに

本報告書は、彦根市金亀町８番２号に所在する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

彦根城下は、天守を中心とする第１郭、次いで内濠から中濠に至る第２郭、中濠から外濠に至る第３郭、外濠以外の第４郭に大きく分類される。第２郭は家老以下1,000石前後の高禄の士分の邸宅が置かれた他、藩主の別邸槻御殿や作事小屋などが配置され、第３郭は武家屋敷及び町屋が、第４郭は町人を主体に比較的身分の低い士分の住地や足軽の組屋敷が広がっていた。調査地は第２郭内に位置し、「御城下惣絵図」[註①]によると、江戸時代末期（天保７・1836年）から明治時代初頭にかけて、印具寿之介・吉田六郎・天野康文・庵原乾三郎などの邸宅跡に相応する（図２参照）。なお、現在、第１郭・第２郭に第３郭の「埋木舎（うもれぎのや）」を加えた地は、国の特別史跡に指定されている。

校舎の改築工事は、特別教室棟と管理棟の２ケ所を計画しており、工事工程の通合から、発掘調査は、特別教室棟については昭和60年３月22日から３月30日まで、管理棟は同年８月７日から９月７日まで実施し、以後整理作業を行なった。調査は、いづれも旧校舎の建っていた位置にあたるため、大規模に撹乱を受けていたが、Ⅱ章以降に詳述するような成果を得ることができた。

註①．この絵図は６幅からなり、藩士と一部の町人の名や屋敷の規模が明示されている。（彦根市立図書館蔵）

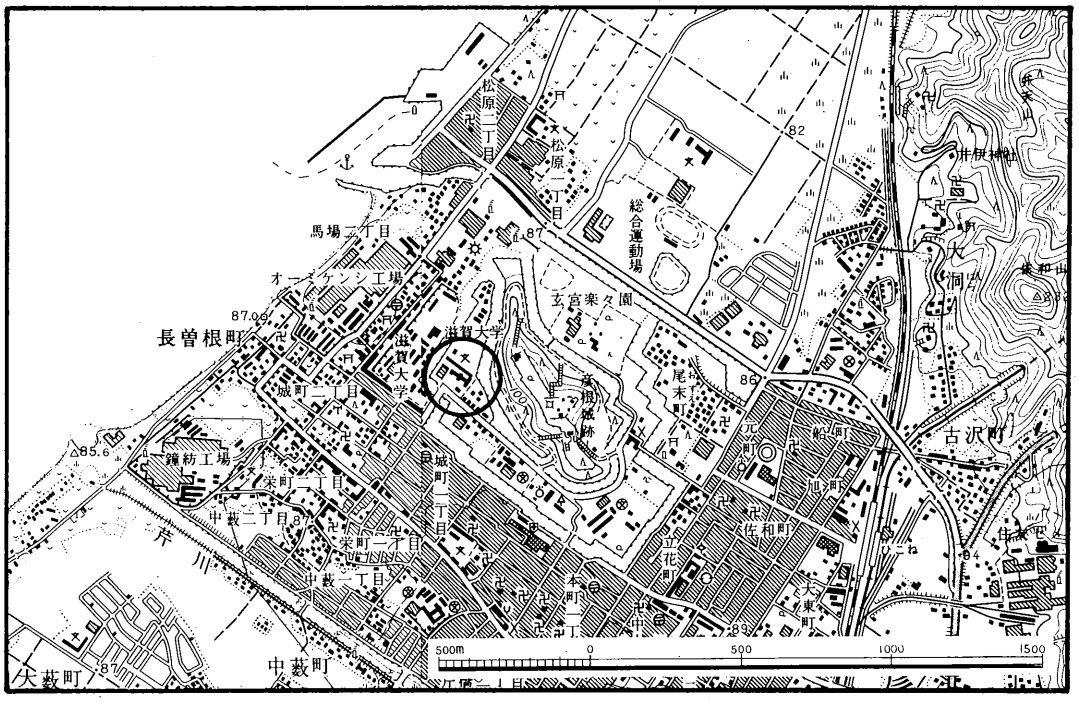


図１．調査位置図

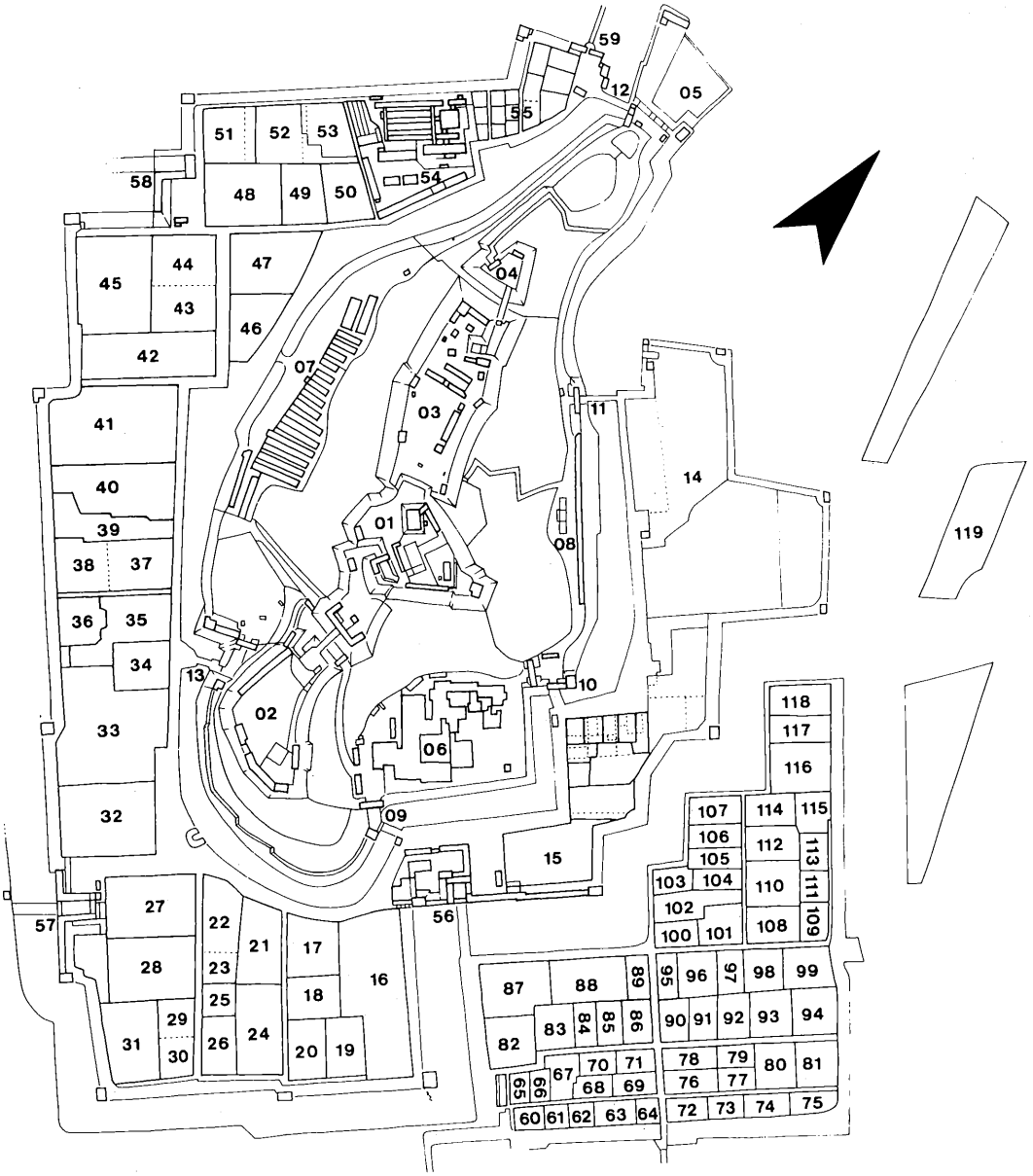


図２．彦根城第１郭・第２郭復原図

（ただし、第１郭は文化11(1814)年御城内御絵図、第２郭は御城下惣絵図の両絵図を合成したもの）

01. 本丸
02. 鐘の丸
03. 西の丸
04. 人質郭
05. 山崎郭
06. 表御殿
07. 米蔵
08. 材木蔵

09. 表門
10. 裏門
11. 黒門
12. 山崎門
13. 大手門

14. 槻御殿(藩主の別邸)
15. 木俣土佐
16. 脇伊織
17. 増田匡
18. 朝比奈藤右ェ門→朝比奈茂己
19. 20. 新野大隅(直中10男)
21. 22. 23. 築後様御屋敷(直中の子)
24. 犬塚求之介
25. 26. 戸塚佐太夫
27. 28. 長野伊豆
29. 木下周吉
30. 広瀬美濃
31. 西山内蔵允
32. 西郷伊豫
33. 庵原主税助
34. 藤田隼人→藤田つ次
35. 内藤茂登
36. 奥山忠衛
37. 38. 横地松二郎
39. 奥山右膳
40. 木俣格造
41. 中野若狭
42. 武節貫治
43. 44. 小野田甚之助→小野田小一郎
45. 宇津木下総→宇津木猛雄
46. 47. 岡本半介→石上省己
48. 印具寿之介(直孝母の里)
49. 酒居右膳
50. 今村浚二
51. 吉田六郎
52. 天野康文
53. 庵原乾三郎
54. 弘道館(藩校)
55. 作事小屋

56. 佐和口
57. 京橋口
58. 船町口
59. 長橋口(開かず口)

60. 竹原留三郎
61. 浅居忠蔵
62. 浦上藤馬
63. 清瀬宗寿郎
64. 渡辺勘十郎
65. 田辺専太
66. 丸山一太夫
67. 曽根惣三郎
68. 山根善五右衛門
69. 八木原謙二郎
70. 八木原熊弥
71. 秋山誠一
72. 岡島丹蔵
73. 竹岡衛士
74. 神尾吉弘
75. 松居善兵衛
76. 越石小源太
77. 三田村静人
78. 内藤喜右衛門
79. 磯島与惣五郎
80. 松居八郎介
81. 仙設佐介
82. 脇藤次→脇蔵人
83. 増田梶之介
84. 小森和次郎
85. 曽根七郎平
86. 青木平十郎
87. 三浦与右衛門
88. 御屋敷(埋木舎)大久保幸男
89. 三浦朱水
90. 横川源蔵
91. 河手閑人
92. 橋本建太郎
93. 松沢辰蔵→松沢勢
94. 竹花小右衛門
95. 松居喜三郎
96. 林七郎右ェ門→林弥五郎
97. 堀部多三郎
98. 大久保小膳→佐藤省二
99. 加茂八蔵
100. 池田斧介→池田太一郎
101. 大久保九一郎→大久保孫七郎
102. 眞野善次
103. 村上十右ェ門
104. 岡沢健三
105. 箕形惣左ェ門
106. 石原西右ェ門
107. 石原善平
108. 西堀治平
109. 大久保郷次
110. 三浦九右ェ門→三浦角次
111. 渡辺友次郎
112. 石居半平
113. 吉川→細谷一学
114. 石居清蔵
115. 萩原八十郎
116. 大久保修
117. 橋本源五郎
118. 富田六三郎
119. 葭地

(注・矢印を付した名前は、左が修正前の判読できたもの、右は修正後のものである。)

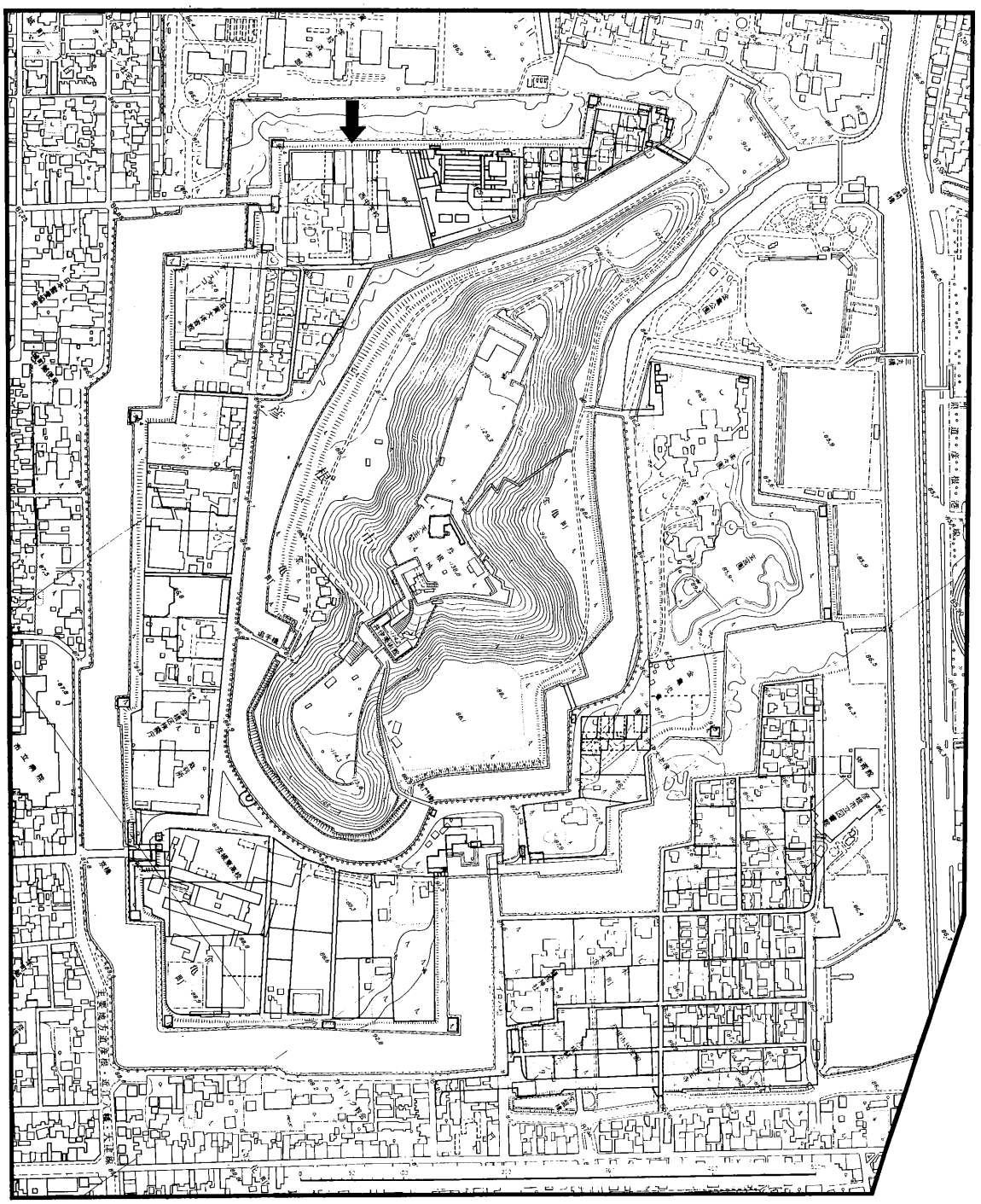


図３．現況地図に「御城下惣絵図」の屋敷割りを加えた地図

（ただし、絵図が現状に合致しない部分については、若干補正した。
矢印は今回の調査地を示す。）

Ⅱ. 歴史的環境

彦根山（城山）は、磯山・大堀山・野田山など周辺の山々と同様、秩父古成層からなる。古くは鈴鹿山地に連続し、その後長く湖中の島であったが、やがて芹川の沖積作用等によってしだいに周辺部が埋まり、彦根城築城前夜には、北東側一帯にいまだ内湖（松原内湖）を残していたものの、他域はおおよそ陸化していたようである。陸化した地には、２・３の村落と広大な水田が広がり、彦根山上の彦根寺に向かって１条の順礼街道が走るモノトーンな風景があった。

この風景は、慶長８（1603）年秋、彦根城の築城と城下町の建設が開始されるとともに、一変した。山上の彦根寺や山下の村落は移転・撤去され、水田の地均化、河川の整理などが大規模に行なわれた。芹川は、現在の河原町より長松院あたりで折れて、彦根山をかすめるように松原内湖へ注いでいたのを、西へ直流させて琵琶湖へと導いた。こうしてできた旧芹川河道及び河口周辺の低湿地は、彦根山の東端（現在の尾末町あたり）にあったとされる尾末山を切り崩し、その土砂によって埋め立てられて、城下町に変貌した。

今回の調査地は、彦根山の西、松原内湖と陸地の接点付近にあたり、築城前の古絵図から、沼沢地状の「江川」が内湖に開口し、山側は「金亀ケ渕」と称されていた様がうかがわれる。当地一帯も又、周辺の山を切り崩し、その土砂によって埋め立てられ、城下町に生まれ変ったのであろう。このことは、発掘調査の結果からも予想された。調査のため、深さ50㎝余の客土及び撹乱土を剝ぐと、灰褐色粘質土ないし赤褐色粘質土からなる江戸期の遺構面が露呈する。両土とも角礫を多く含んだ山土である。これらの、いわゆる埋め立て土砂と考えられる層は比較的薄く、30～40㎝程度で、その直下には青灰褐色の幾分グライ化したシルト又は砂質土が広がっている。湧水を伴ない腐植土層が薄く介入するなど、埋め立て以前、当地一帯が内湖縁辺部であったことを物語っていた。

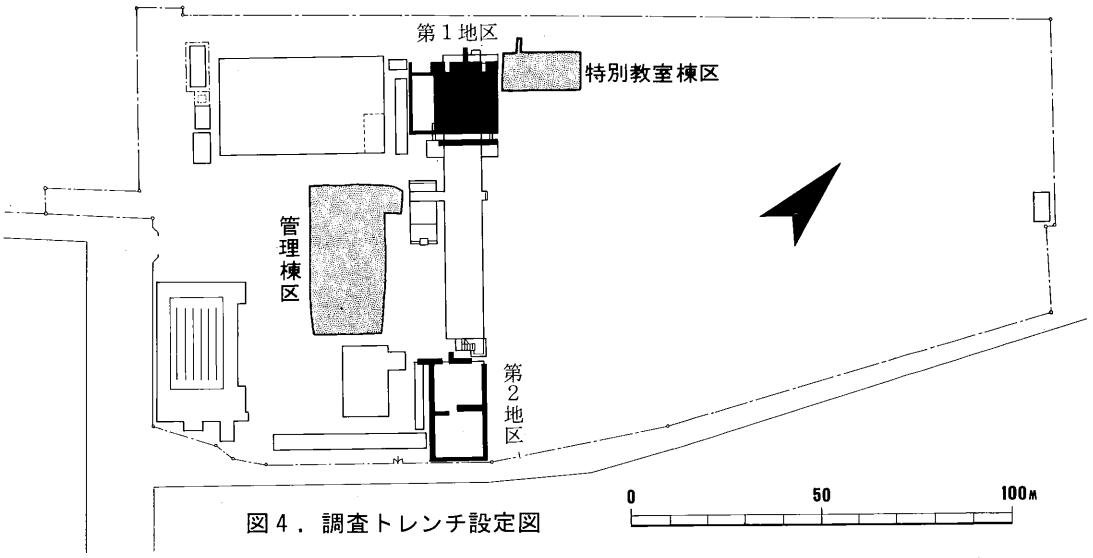


図４．調査トレンチ設定図

Ⅲ. 検 出 遺 構

特別教室棟区

特別教室棟区は、普通教室棟の北に位置し、北西には中堀に面する土塁が築かれ、南東はグラウンドが広がっている。調査の結果、当区は旧校舎の基礎工事等によって大幅な撹乱を受けていた（破線部分）が、残地の精査の結果、遺構面を２層確認することができた。

上層の遺構面は、表土下の客土・整地土等を40～50㎝余掘削した結果、検出することができた。灰褐色粘質土をベースとする。塀（ＳＡ０１）と考えられるピット列、十字に交わる石組みの雨落ち溝（ＳＤ０１・ＳＤ０２）、それに伴うと考えられる石組みの溜め桝状遺構（ＳＫ０１）、円形土壙（ＳＫ０２・ＳＫ０３）などがある。

下層については、上層に遺構の遺存しないトレンチ北コーナー付近を部分的に掘り下げた結果、遺構面を確認することができたものである。赤褐色粘質土をベースとする。先のＳＫ０１に類する石組み溜め桝状遺構（ＳＫ０４）などを検出している。以下、詳述することにしょう。

◀上層遺構▶

塀　ＳＡ０１（図５）

トレンチの長軸方向にほぼ平行して走るピット列からなる。ピットは小さいもので径0.3m、大きいものでは径0.8ｍあり、ピット間は１間（１間を６尺５寸つまり1.98mと考える）ないし1.5間を計る。類例が彦根城表御殿跡[註①]にあり、表御殿を描いた古絵図との照合から塀の位置と判断される。従って、本例も塀の痕跡であった可能性が高い。塀の倒壊を防ぐため、塀の内側にひかえをおよそ等間隔に添える事が多いが、そのひかえの打ち込み跡がピット列として遺存しているのではないかと予想される。

雨落ち溝　ＳＤ０１・ＳＤ０２（図５）

ＳＤ０１は塀の基礎ＳＡ０１に平行し、塀より１ｍ余南東側に造られた石組みの雨落ち溝である。現在、南東側の石列を一部で１段かろうじて残すのみで、他はその掘り方の痕跡を残すにすぎない。溝幅0.3ｍを測る。ＳＤ０２はＳＤ０１に直交する溝で、ＳＤ０１同様石組みの雨落ち溝であったと予想されるが、現状ではその直線的な掘り方を残すのみである。ＳＡ０１を潜り、土塁下を暗渠で通して中堀へ流入させていたのであろう。両溝とも覆土が同じであることから、併存していたものと考えられる。なお、ＳＤ０１から土塁に至る間約５ｍは、灰褐色粘土に砂を加えて築き固め、貼り床状に仕上げている。建物外周部であろうか。

溜め桝状遺構　ＳＫ０１（図５）

ＳＤ０１の一部を拡幅し、深く掘り下げた石組みの溜め桝であったと予想される。長さ2.0ｍ、幅0.5ｍの長方形を呈し、深さ0.5ｍ程度の規模が復元される。大半の石が抜かれて遺存しないが、わずかに遺存する北コーナーは、石積みの上部を板石および平瓦で囲っている。こ

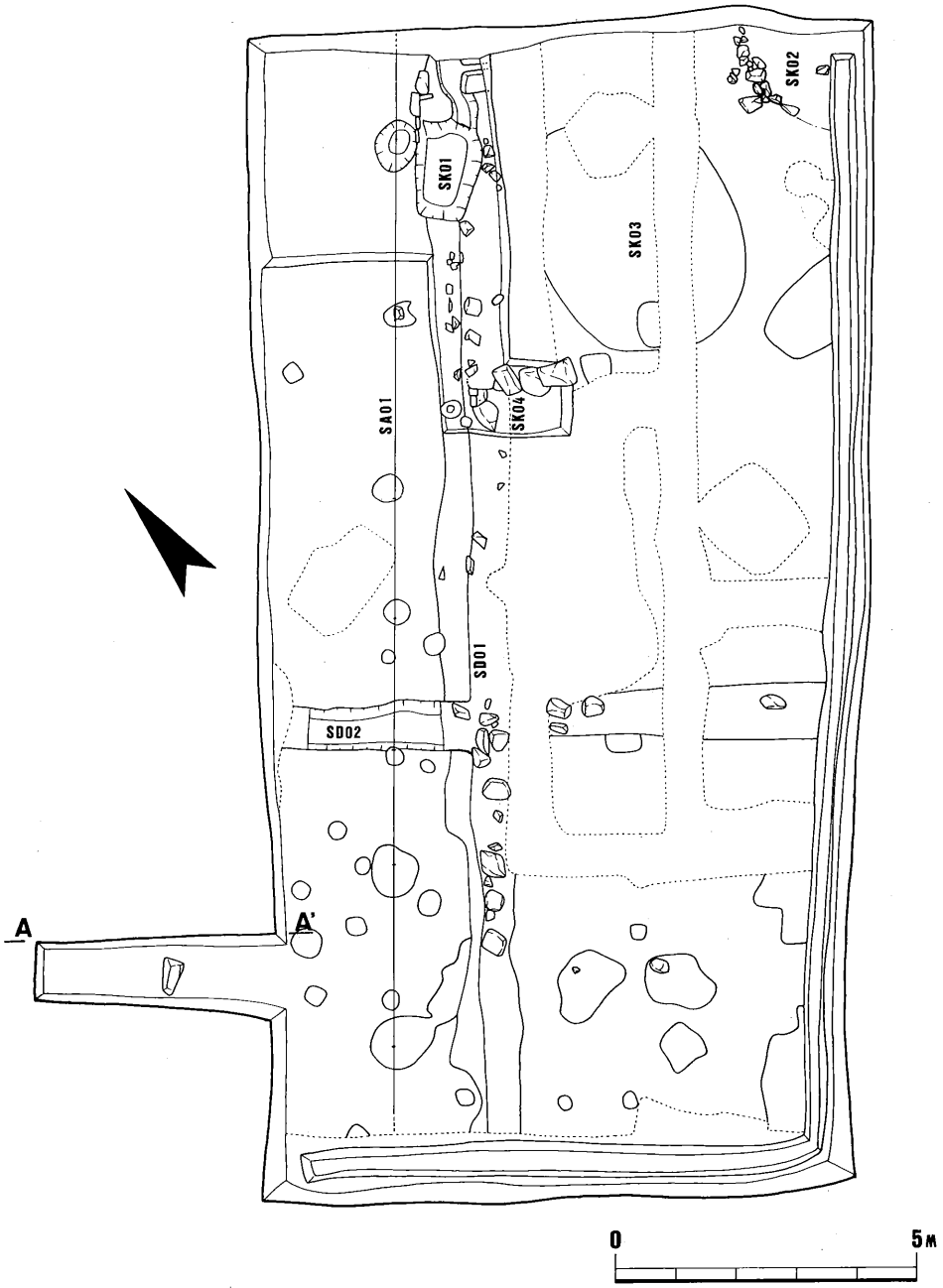


図５．特別教室棟区遺構全図

の桝は、ＳＤ０１を流下してきた泥水を一旦沈殿させ、上水のみオーバーフローさせて再度流していたものと考えられる。覆土は、黒灰褐色粘質土の単純層である。

円形土壙　ＳＫ０２・ＳＫ０３（図５）

径3.0ないし4.0ｍ程度の円形を呈する大型の土壙である。断面は浅いレンズ状をなし、黒灰褐色粘質土によって覆われている。ＳＫ０２は、４分の１程度を検出したにとどまるが、円周にそって角礫をめぐらせている。用途は不明である。

その他の遺構　（図５）

トレンチの南コーナー付近で、礎石の掘り方と考えられるピット２列を検出した。径1.0ｍ余の不定形な形状を示し、両者間1.5間を計るが、周辺で同様のピットを確認できないため、建て物の規模等については不明である。礎石は遺存せず、わずかに根石の一部が掘り方内に顔を見せている。

雨落ち溝の北西側で、小ピットを多数検出した。建て物として把握できないが、簡易な小屋状の建て物が塀と相前後して建てられていたのであろう。

その他、土塁の状況を確認するため、トレンチの北西側に試掘溝を入れた（図６参照)。その結果、灰褐色粘質土からなるベース上に、⑧灰色砂層、⑦灰褐色粘土層、⑥淡黒灰色粘質土層、⑤黄灰褐色粘質土層が順次層を重ねていた。当初は土砂をたたいて固めた、いわゆる「たたき土居」であったと考えられるが、現状では土砂の崩落により旧状を保っておらず、傾斜も比較的なだらかになっている。なお、明治以降、土塁としての機能を失ってからも、④黒灰褐色粘質土層、③淡灰褐色粘質土層、②黒褐色粘質土層等が層を重ねている。④層は瓦や土器等の遺物が混入する整地層であり、②層は草木の腐植により成起した層である。

◀下層遺構▶

溜め桝状遺構　ＳＫ０４（図５）

上層遺構のＳＫ０１に類する施設である。当初上層のＳＤ０１を南東へ１ｍ程度平行移動した位置に雨落ち溝が走っていたと考えられ、その一部を拡幅・掘り下げて、石組みの溜め桝にしていたのであろう。石組みの大半は、旧校舎の基礎工事によって破壊・移動し、プランを復

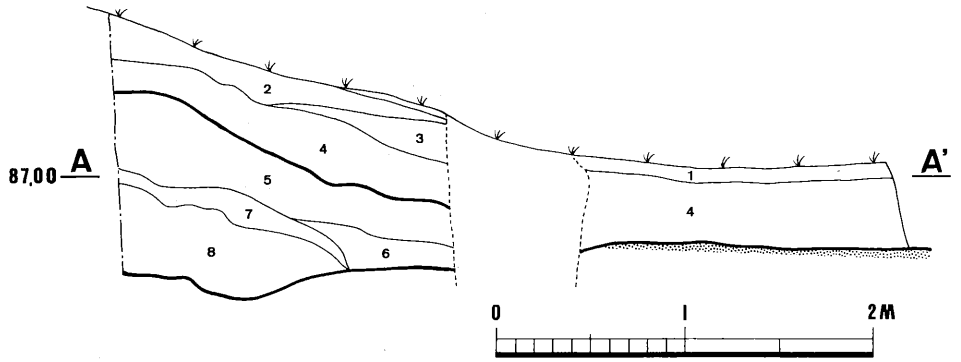


図６．土塁断面図

元し難いが、わずかに北コーナーのみ旧状を残している。大・小の石を適宜配して方形に組み上げていく様がうかがえる。

その他の遺構　（図５）

上層でいうＳＤ０１より北東側一帯は、やはり灰褐色粘土に砂を加えて築き固め、貼り床状に仕上げている。時期は変わっても、このあたり一帯は建物の外周部であったのだろう。

特別教室棟区の調査の結果、ＳＤ０１の雨落ち溝を境として、その南東側一帯には、遺構として明確なものは検出しなかったが、武家屋敷の奥向きの各建て物が広がっていたものと予想される。一方、北西側は、塀をへだてた外側が、土塁に至るまで、一時的に小屋等の小規模な建て物が建てられることはあっても、基本的に屋外であったと考えられ、地盤が築き固められていた。又、上層のＳＫ０１、下層のＳＫ０４は、雨落ち溝に適宜設けられた時期の異なる溜め桝と予想され、当時の泥水処理の方策として見のがせないものがあろう。なお、「御城下惣絵図」をみると、当該域は、天野康文邸と庵原乾三郎邸の両屋敷境付近に位置しており、ＳＤ０２の雨落ち溝が、両屋敷を画していた可能性も考えられる。

管 理 棟 区

管理棟区は、普通教室棟の南西、体育館の東に位置する。当区も特別教室棟区と同様、旧校舎の基礎あるいはそれ以前の建て物の解体や整地毎に大幅に撹乱を受けており、遺構の残存状態はおしなべて悪い。ただ、精査によって灰褐色粘質土からなる比較的安定した整地層が確認され、以下の遺構が検出された。この整地層に至るまで、地表からおよそ50～60㎝を計る。

トレンチ中央付近および南隅で塀と考えられるピット列（ＳＡ０２・ＳＡ０３）を、また、北隅および東隅から建て物（ＳＢ０１ ～ ＳＢ０５）を検出した。東隅の建て物４棟は、２棟ずつがそれぞれ方位を異にし、しかも重複している。その他、中央付近でトレンチをＴ字に分かつ石組みの雨落ち溝（ＳＤ０３・ＳＤ０４）が長く伸び、その北で井戸（ＳＥ０１ ～ ＳＥ０３）、東で便槽（ＳＬ０１）が存在する。土壙として一括したＳＫ０５ ～ ＳＫ０７あるいは大型の埋甕であるＳＰ０１なども、ＳＬ０１と同様に便槽であった可能性が考えられる。西端で検出したＳＸ０４は、その西に広がっていたと予想される建て物を限る漆喰製の犬走りであろうか。ＳＸ０４の南東側は坪庭であったらしく、漆喰池ＳＸ０１が確認される。同様にＳＤ０４の南東側にもＳＡ０２に面して坪庭が存在したようで、漆喰池ＳＸ０２が存在する。ＳＸ０２のすぐ南の不定形な土壙ＳＫ０８も、ＳＸ０２より古い池であった可能性が考えられる。トレンチ北東辺近くで検出したＳＰ０２、ＳＸ０３はいづれも用途が不明だが、ＳＸ０３については樋水管の分岐点に配された漆喰枡ではないかと予測される。以下、各遺構について詳述しよう。

塀　ＳＡ０１・ＳＡ０２（図７）

トレンチの中央付近でＳＡ０２、南隅でＳＡ０３をそれぞれ検出した。ＳＡ０２は平行して走る雨落ち溝（ＳＤ０４）のすぐ南東側に位置し、径0.4ｍ前後の小ピット列からなる。ピット間は３尺 ～ ５尺と規則性が余り認められない。特別教室棟区のＳＡ０１と同様、塀の倒壊を防ぐため塀の内側に添えられたひかえの打ち込み跡と考えられる。その場合、塀はＳＤ０４の南東側の側石上に据えられていたのであろう。

南隅のＳＡ０３は、径0.4ｍと0.5ｍの大小２類の小ピット列からなる。ピット間は４尺～６尺と規則性を余り認め難い。やはり塀の内側のひかえの打ち込み跡と考えられる。

建て物　ＳＢ０１ ～ ＳＢ０５（図７）

トレンチの北隅でＳＢ０１、東隅でＳＢ０２ ～ ＳＢ０５をそれぞれ検出した。ＳＢ０１は径0.7ｍ前後の円形を基調とするピット列からなる。本来、礎石が据えられていたものと考えられるが、調査時には礎石はおろか根石もほとんど遺存せず、わずかに整地層の色調とは異なる暗灰褐色粘質土によって覆われていたピットのみ検出することができた。それから復元すると、この建て物は４ピットを検出した列を南東限とし、南西限はＳＤ０３近くまで伸びていたものと考えられる。南西から北東方向の棟が考えられ、桁間は１間（１間を６尺５寸つまり1.98ｍと考える）、梁間は1.5間の比較的大きな建て物であろう。なお、ＳＢ０１の床下一帯は黄褐色粘質土が厚さ５㎝程度に貼られており、建て物外周の東南側では一部灰褐色粘土に径１㎝前後の玉砂を加えて築き固めていた。人が歩く屋外であった可能性が高い。

東南の４棟は、２棟ずつ（ＳＢ０２・ＳＢ０３とＳＢ０４・ＳＢ０５）がそれぞれ建て物の方位を異にしており、しかも重複している。ＳＢ０２・ＳＢ０３は方位をＮ－48°－Ｗに保つ建て物である。一点破線で明示（図７参照）した赤褐色の焼土層を切り込んで、礎石を据える掘り方が掘開されている。掘り方内には根石がほとんど遺存せず、先のＳＢ０１と同様の暗灰褐粘質土で覆われている。焼土層は、後述のＳＢ０４ないしＳＢ０５の建て物を解体焼却あるいは焼失した際の土砂を整地した層位であり、ＳＢ０２ないしＳＢ０３の建て物を築造する際に貼り床状に築き固めて床下にしている。ＳＢ０２は、北西から南東方向の棟を持つ小規模な建て物と考えられ、桁行１間以上、梁行２間を数える。１間の柱間は６尺５寸である。ＳＢ０３は棟の方向を確認できないが、礎石の掘り方が小さく、あまり堅固な建て物とは言い難い。柱間は北西から南東方向が６尺５寸、北東から南西方向がおよそ９尺を計る。ＳＢ０２とＳＢ０３は重複しているが、両棟の新旧関係は判別できない。又、両棟は先述のＳＢ０１やＳＡ０３と方位を一にしており留意される。

ＳＢ０４・ＳＢ０５は、方位をＮ－42°－Ｗに保つ建て物である。厚さ10㎝余りの赤褐色の焼土層を削平した段階で検出した。掘り方内には根石がほとんど遺存せず、掘り方上部には焼土の流入が顕著である。解体焼却あるいは焼失と関連する建て物であろう。ＳＢ０４は棟の方向を確認できず、礎石の掘り方も小さい。柱間は、いづれも６尺５寸を１間とする。ＳＢ０５も、棟の方向が不明で、やはり礎石の掘り方が小さい。柱間は、北西から南東方向で６尺を１間とし、北東から南西方向は９尺余を１間とする。

雨落ち溝　ＳＤ０３・ＳＤ０４（図７・ＰＬ.２）

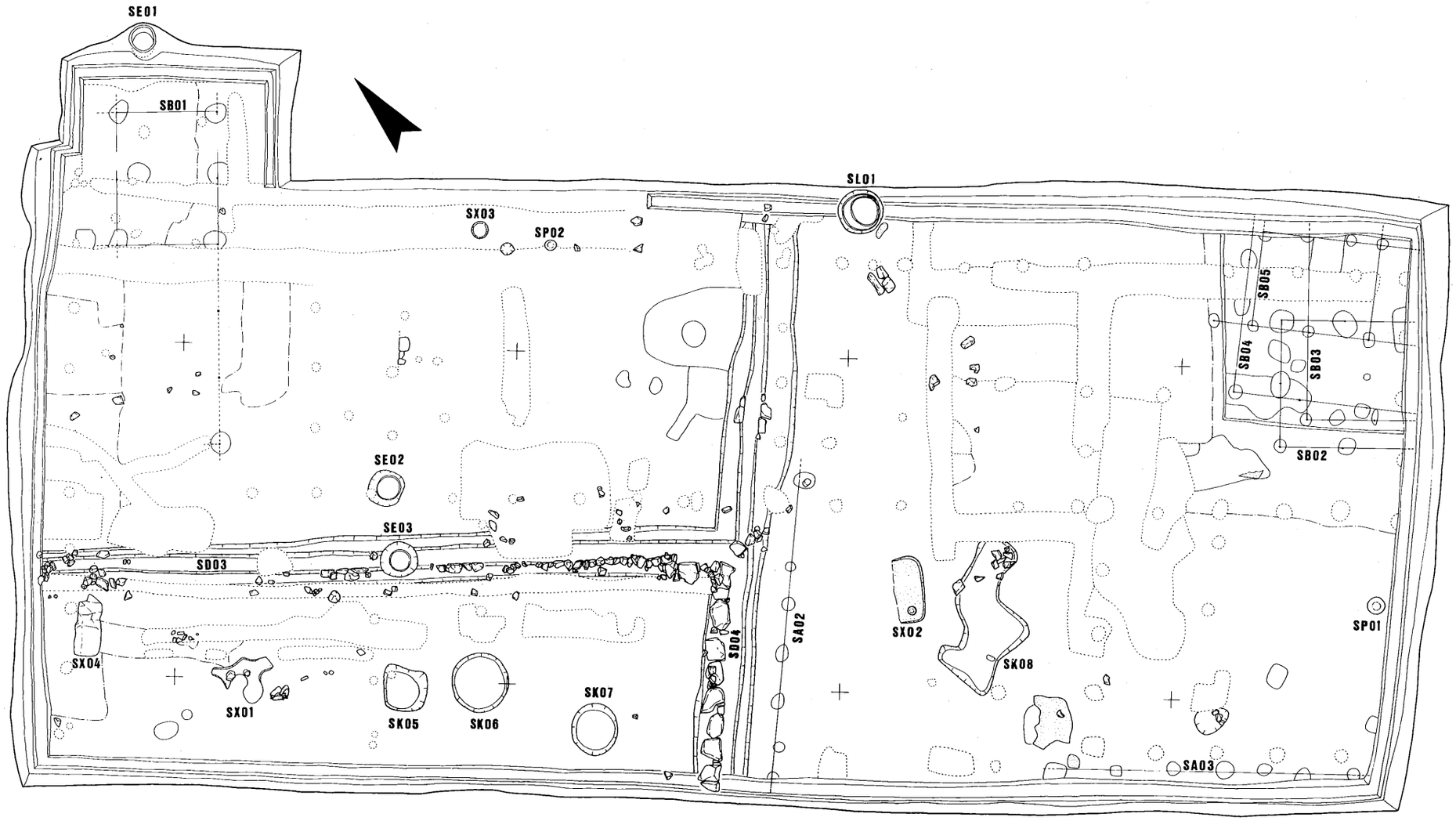


図７．管理棟区遺構全図

0 10M

トレンチの中央付近で、トレンチをＴ字に分かつ形で検出した石組みの雨落ち溝である。トレンチの長軸に沿うものをＳＤ０３、短軸に沿うものをＳＤ０４とそれぞれ称す。ＳＤ０３は全長21ｍ余、溝幅0.5ｍを計り、南西側の側石の最下段を残すのみである。遺存する側石は小規模な角礫を主体としており、本来はさらに上段に大型の石が積まれていたものと予測される。北東側では、石はほとんど遺存せず、その痕跡を残すに過ぎない。底部に底石は確認されず、溝は黒灰褐色粘質土の単純層によって覆われている。覆土中から土器等が比較的豊富に出土している。ＳＤ０４は全長17ｍ、溝幅0.5ｍを計り、北西側の側石の一部を残している。側石は比較的大型の１段が確認されている。覆土はＳＤ０３と同様の堆積状況を示す。

井戸　ＳＥ０１ ～ ＳＥ０３（図７・８、ＰＬ.３・４）

ＳＥ０１はトレンチ北端に位置する。調査時には、上面をコンクリートで覆って通路に供していたが、近年まで使用していた形跡がうかがわれる。当初は円筒形の漆喰管を順次積み上げて井側としていたようだが、その後、湧水を得るために竹筒を打ち込み、上部0.5ｍ余を残して埋めてコンクリートを塗り、さらに井側をコンクリートで１段付け加えている。コンクリートの井側は、高さ0.6ｍを計る。付け加えた際、井側が北東方向に0.3ｍ程度ずれている。この新しい井側内から近年の多量の雑器類が出土した。

ＳＥ０２は、ＳＤ０３のすぐ北東に位置する。桶を倒立させて、順次積み重ねて井側とするタイプの井戸である。桶は、口径75㎝、底径71㎝、深さ55㎝程度である。本来は桶を幾段も積み重ねた比較的深い井戸であったと考えられるが、しだいに堆積する泥土のために、現況では１段目の桶の下部で４枚の板材を円形に切って泥土上面に蓋をし、板材に１孔を穿って湧水を導く竹筒を打ち込んだ、極めて浅い井戸として再利用を計っている。この点は、先のＳＥ０１と良く似ている。井側内は①灰青黒色砂泥からなる投棄層によってほぼ埋まり、底部で使用時のヘドロである②黒褐色泥土がわずかに確認される。①層内は瓦や陶磁片などが多量に混入しており、②層では植物遺体が検出される。③青灰褐色砂質土で充填された掘り方は狭く、桶の大きさにあわせて井戸を掘り進めながら、順次桶を積んでいったものと予想される。

ＳＥ０３は、ＳＤ０３を切り込んで掘開された井戸である。長さ１ｍ、幅10㎝、厚さ1.5㎝程度の板を縦に円形に組んで細長い筒状にしたものを、幾段か積み重ねた、いわゆる円形縦板型木組み井戸である。調査で、井筒を３段まで確認している。筒の規模は下段のものほどしだいに小さくなるようで、２段目の井筒の上端径59㎝、３段目では54㎝を計る。１段目の井筒の下端近くの外側にはタガをはめていた痕跡が認められる。井側内には、①黄灰褐色粘質土層、②灰褐色粘質土層、③青灰褐色泥土層が順次層を重ねている。いづれも井戸としての機能を失ってからの投棄層と考えられる。井側のほぼ中央には、投棄する際に入れられた息抜き用の竹筒が１本縦に入っている。④青灰褐色砂質土で充填された掘り方は狭く、ＳＥ０２と同様、井側の大きさにあわせて井戸を掘り進めながら、順次井側を積んでいったものと考えられる。

便槽　ＳＬ０１（図７・８、ＰＬ.４）

ＳＬ０１は、トレンチ北東辺の中央付近に位置している。槽は桶を利用する。大型の槽から

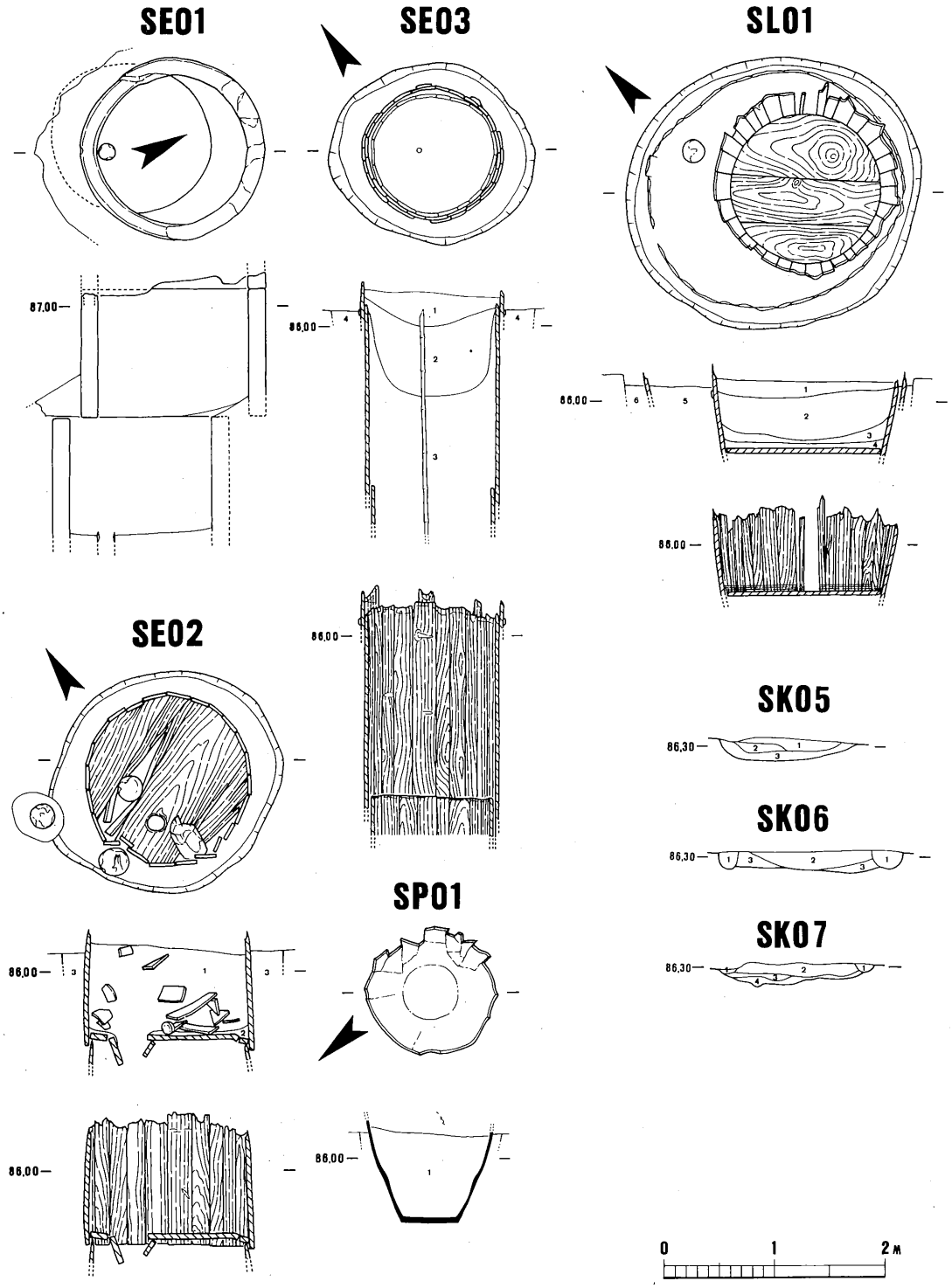


図８．井戸・便槽等実測図

小型のものへと一度造り変えられており、大型のもので口径114㎝、小型のもので口径83㎝、底径70㎝、現存高38㎝を計る。小型の桶の上部外側にはタガが確認され、下端近くの内側には幅１㎝余の横位の削痕が顕著である。後者は、底板を上から挿入する際、入りにくかったために側板を削ったことに起因する痕跡であろう。小型の桶内には、①青灰褐色粘土、②青灰褐色砂質土、③灰褐色砂質土、④黒紫色泥土が順次層を重ねる。①～③層は便槽としての機能を失った後の投棄層であり、④層は利用時の堆積層で若干の臭気を伴なう。大型の桶の上部は、⑤暗青灰褐色砂質土で覆われ、この桶の掘り方には⑥淡青灰褐色砂質土が充填されている。

土壙　ＳＫ０５～ＳＫ０８（図７・８）

ＳＫ０５～ＳＫ０７の３例は、ＳＤ０３の南に連なって検出された。ＳＫ０５は隅丸方形を、ＳＫ０６・ＳＫ０７はほぼ正円形を呈す浅い掘り込みからなる。ＳＫ０５は、①黒灰褐色砂質土層、②灰褐色粘質土層、③青灰褐色砂質土層が層を重ねている。いづれの層位も投棄層と考えられる。ＳＫ０６・ＳＫ０７には、①黒褐色炭化層、②黒灰褐色粘質土層、③赤褐色粘土層が順次堆積する。①層は、平面的にみると正円形プランの内周をドーナツ状に構成するものである。当初板材が円形に立てられており、それが炭化したものと解される。②層は投棄層、③層は遺構の底部を貼り固め、あわせて①層の板材を固定していたものと考えられる。これらのことから、以上の土壙は、本来桶状のものを埋置していたと予想され、その可能性として最も高いのが便槽ということになろう。

ＳＫ０８は、後述のＳＸ０２のすぐ南に位置し、検出レベルからＳＸ０２より古いと考えられる不定形な土壙である。東辺には角礫が集積し、その西約１ｍ間は径数㎝の小さな杭が不規則に連なっている。ここから金箔で楓の葉をあしらった黒漆碗の破片（写真１）が出土している。土壙の底部には若干粘土を貼った形跡が認められ、小さな池ではなかったかと考えられる。

埋甕　ＳＰ０１・ＳＰ０２（図７・８、ＰＬ.６）

ＳＰ０１はトレンチの南東辺付近で、又ＳＰ０２は北東辺付近でそれぞれ検出した埋甕である。両者とも正位置で土中に埋設されていたと予測され、検出段階では胴部下半を残して上部は削平されていた。ただ、ＳＰ０１では、その破片が四周に散在していたため、接合したところ、ほぼ全容が復元された。その結果、ＳＰ０１は、直口気味の口縁部にやや肩の張る胴部の付いた甕であり、口径58㎝、肩部最大径69㎝、底径22㎝、高さ78㎝を計る。甕内は青灰黒色粘質土で覆われ、甕の下胴部内側には硝酸ア

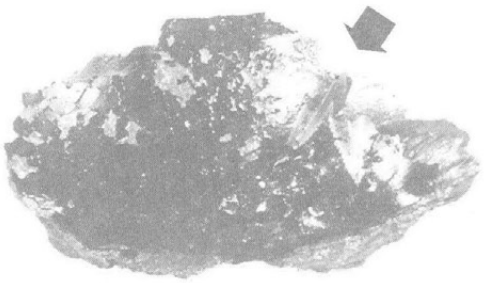


写真１．ＳＫ０８出土の漆椀

ンモニウムの被膜が全体に付着している。彦根城下の発掘調査の成果によると、便槽の埋甕にはほとんど羽釜を利用しているが、本例も便槽に供されていた可能性が高い。ＳＰ０２は、底径15cm余の小規模な甕を土中に埋めたものである。用途は不明である。

漆喰池　ＳＸ０１・ＳＸ０２（図７・９、ＰＬ.５・６）

ＳＸ０１は、後述する犬走り（ＳＸ０４）の南に位置する三ッ葉状の漆喰池である。全体に遺存状態は不良で、池の底部を残して肩部より上は欠損している。池中の北西に偏して数寄な石を置いて岩島を表現し、中央付近の量深部には平瓦と桟瓦を三角柱状に組んで埋置している。上蓋は約半分が開口し、底部を形成する平瓦の上には円礫が敷かれていた。鑑賞用小魚のための寝床ではないかと考えられる。

ＳＸ０２は、雨落ち溝（ＳＤ０４）やそれと平行して走る塀（ＳＡ０２）などの南東側に位置する漆喰池である。北西側過半を欠損しているが、おそらく隅丸方形を呈していたものと予測される。南隅に偏して甕が１つ埋置されている。甕は口径20cm、底径11cm、高さ27cmを計る。先のＳＸ０１と同様に鑑賞用小魚のための寝床ないしは水草の植込みの用途が考えられる。池の底部は平担であり、形状とともに、ＳＸ０１に比べると比較的シンプルな漆喰池ということができよう。

漆喰桝　ＳＸ０３（図７、ＰＬ.６）

径50cm余の、底部をやや丸く収めた円筒形を呈する漆喰製の丸桝である。ＳＰ０２のすぐ北西で検出した。上部は欠損し、わずかに下半部を遺存しているにすぎない。内面は水垢の沈着が著しく、樋の曲折部に用いられていた桝と予測される。おそらく、桝の上位で孔を穿ってある方向から樋が取り付き、他の方向に必要な角度を取って、別の樋が取り付いていたのであろう。彦根城下の水道は、遠く外堀の元桝（現在の城東小学校裏手付近）から、噴出水圧を利用

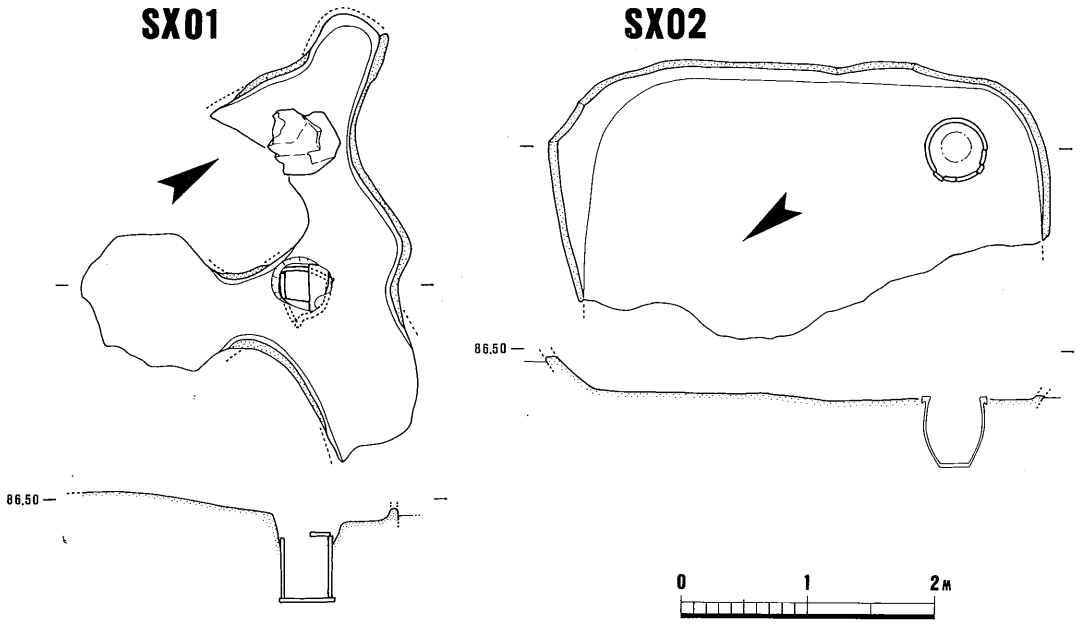


図９．漆喰池実測図

して樋で導いていたことが、古絵図などから知られる。それによると、樋として石樋・木樋・竹樋そして新しくは瓦樋が存在したようである。ところが、石樋・瓦樋などについては、曲折部や枝別れする箇所に用いられた枡が方形に描かれており、唯一竹樋のみ円形に表現されている。又、今回の検出箇所が屋敷割内にあり、石樋・木樋・瓦樋などのように口径が大きくて多量の上水を送る必要のない支線水系に位置することなどを考慮すると、本例のような漆喰製の丸枡は、おもに竹樋用に製作されたものといえそうである。ちなみに、こうした漆喰製の丸枡は、表御殿跡の発掘調査などでも、泉水や湯殿の多い奥向きの要所で検出されている。

犬走り　ＳＸ０４（図７、ＰＬ.６）

トレンチの西隅付近で検出した漆喰遺構である。現存長1.9m、幅0.8m、厚さ10cmを計る。この遺構の直下には玉砂が敷かれている。後世の加圧によって多方向に亀裂が入っており、遺存状態は良くない。本来、この遺構の北西に広がっていたと想像される建て物の、外周をめぐる漆喰製の犬走りではなかったかと考えられる。それが、この箇所のみ破壊をのがれて、部分的に遺存したのであろう。

管理棟区の調査の結果、ＳＤ０３とＳＤ０４の両雨落ち溝を境として、トレンチを大きく３区画に分つことができる。北側の区画は、北西方向にＳＢ０１の建て物があり、そのすぐ南東は屋外であろうか表土が築き固められていた。さらに南東方向には、井戸（ＳＥ０２）や埋甕（ＳＰ０１）・漆喰桝（ＳＸ０３）などが点在しているが、このあたり一帯の建て物の存否あるいはその機能については不明である。トレンチ北端の井戸（ＳＥ０１）は、ＳＢ０１端に組み込まれて水屋を形成していた可能性も考えられる。

西側の区画は、北西端で建て物の南東を限ると思われる犬走り状の漆喰遺構が確認される。その南には漆喰池（ＳＸ０１）があり、一帯が建て物のない坪庭空間であったと予測された。さらに南には、便槽の痕跡ではないかと思われる土壙が３基連なっており、屋外便所ないし南西に伸びる建て物の北東辺と考えられる。

南東側の区画は、前２者と溝に付設された塀によって区画されており、東側で小規模な建て物が検出されている。３期の建て変え（ＳＢ０２ ～ ＳＢ０５）が認められ、その間に１度整地を実施していた。これらの建て物のすぐ北西および南西側は、それぞれ便槽（ＳＬ０１・ＳＰ０１）が確認されるものの、建て物の存否については不明である。ただ、南西端では１条の塀が検出されており、屋敷内を区分する機能を有していたのであろう。一方、この区画の西側には漆喰池（ＳＸ０２）や池状遺構（ＳＫ０８）があり、一帯が建て物のない坪庭空間として存続したものと考えられる。なお、「御城下惣絵図」をみると、当該域が、北に天野康文、西に吉田六郎、南東に印具寿之介の各屋敷があり、雨落ち溝ＳＤ０３・ＳＤ０４の境界とほぼ一致している（図３参照)。ただ、今回検出した雨落ち溝が、絵図に描かれた時期の境界かどうかについては判別できない。

注①．1983年～1984年にかけて、博物館建設に先立ち実施した表御殿跡の全面的な発掘調査である。近刊。

Ⅳ. 出 土 遺 物

土器・陶磁器

特別教室棟区

遺構内からの出土品には恵まれなかったが、包含層から若干出土しているので紹介することにしよう。

鉢（Ｐ０１）　浮文で竜をあしらった緑釉の鉢である。直線的に立ち上がる体部に、大きく外反する口縁部が付く。瀬戸・美濃系か。

摺鉢（Ｐ０２）　赤褐色に焼締めた無釉の摺鉢である。胎土は良好で、粘土紐巻き上げ成形によると考えられる。器高は11.3cmを計り、摺目は10条で幅 2.4 cmの櫛状工具を使用する。底部は平底で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部外面に幅広い縁帯を形成している。この縁帯外面に２条、内面に１条の凹線がめぐる。備前焼か。

管 理 棟 区

ＳＤ０３を始めＳＥ０２・ＳＫ０６・ＳＸ０１・ＳＰ０２の各遺構及び包含層から、比較的豊富に出土しているので以下に紹介しよう。

ＳＤ０３出土

焼塩壺の蓋（Ｅ０１）　円形の粘土板の端部を折り込んだ焼塩壷用の蓋である。上面はヘラで丁寧にならしており、内面は布目の圧痕を残している。口径 7.5 cm、高さ 1.8 cmを計る。

蓋（Ｐ０３）　内面にかえりをもつ灰釉系の蓋である。体部外面には、鉄釉等で秋草文を描く。径 5.4 cm、器高 0.8 cmを計る小規模なものである。京焼か。

香油壺（Ｐ０４）　大きくふくらむ肩部に小さな頸部とラッパ状に開く口縁部の付いた香油壷である。肩部にはシダ類の葉文が２ケ所に描かれ、全体に灰釉を施す。底部には比較的大きな撓高台が付く。口径 2.8 cm、底径 4.9 cm、器高 8.2 cmを計る。

徳利（Ｐ０５）　口縁を外側に折り曲げて縁帯をつくり、頸部から肩へ向かってなで肩に広がり、胴部でやや張りながら腰部へすぼまる方向にある１升徳利である。外面一帯に茶褐色の鉄釉を施し、その後表裏に線刻文字を入れている。文字は「○○町」と「かさや」と判読される。又、底部には墨書にて「かさや○御酒」と書かれている。口径 4.6 cm、底径 9.0 cm、器高 25.8cmを計る。

瓶（Ｐ０６）　底部へ向かって緩やかに広がる小型の瓶である。口縁には一端をつまんで注口部を作る。体部に１ケ所抽象的な文様を配した後、透明釉を塗布する。底部には墨書にて、「為ノチ」と書く。口径 2.0 cm、底径 3.6 cm、器高 7.8 cmを計る。仏花瓶か。

行平の把手（Ｐ０７）　鉄釉を施した行平の把手部である。把手の上面には草花浮文が配されている。

鉢（Ｐ０８）　体部は直立気味に立ち上がり、口縁端を丸く収めた鉢である。底部は回転ヘラ削りの痕跡を残し、体部外面には７条の凹線を廻らす。その後、体部を６ケ所で押さえて六角形状に保ち、内外に灰釉を塗る。底部内面には目痕が４ケ所に認められる。口径15cm程度、器高8.5 cm、底径9.4 cmを計る。火入れあるいは水指の用途に供されたものか。

火鉢（Ｐ０９）　口縁部を内方へ巻き込む小型の火鉢である。底部は円形の粘土板を貼り付けて高台とする。体部外面に灰釉をかけ、鉄釉等で山水を描いている。器高18.7cmを計る。

摺鉢（Ｐ１０）　茶褐色の鉄釉を施した摺鉢である。胎土中には小砂粒を含む。器壁は薄く、体部は外湾気味に外上方に開く。口縁部は肥厚させて縁帯を形成するが、比較的シャープに外へひねり出している。口縁部内面には１条の凹線がめぐる。摺目は７条で、幅1.8 cmの櫛状工具を使用する。信楽焼か。

染付腕（Ｗ０１　～　Ｗ０３）　Ｗ０１は、椀形の器形に撓高台の付く染付埦である。体部外面には呉須により花唐草文を、又内面の茶溜りには松葉文を円形に描いている。口径10.5cm、器高5.5 cm、高台径3.6 cmを計る。

Ｗ０２は、椀形の器形に撓高台の付く小型の染付埦である。体部外面には呉須によって松梅を２段に配している。口径7.2 cm、器高3.6 cm、高台径2.9 cmを計る。

Ｗ０３は、半筒形の器形に撓高台の付く小型の染付埦である。体部外面には摺絵手法によって唐草文を描いている。口径5.2 cm、器高3.2 cm、高台径3.0 cmを計る。

ＳＥ０２出土

染付鉢（Ｗ０４）　外湾する体部に、逆Ｓ字状に内側へ丸め込む感じの口縁が付く染付の鉢である。底部には撓高台が付く。見込みには松梅文を大担にアレンジし、体部外面には唐草文を横位に配す。口縁端は鉄釉を塗って口紅とする。高台内は一部欠損しているが、「大明成化年製」と読める。口径20.0cm、高台径9.7 cm、器高7.8 cmを計る。

ＳＫ０６出土

燈明皿（Ｅ０２）　中世以来の伝統をもつ素焼きの皿、つまりカワラケを転用したシンプルな燈明皿である。口縁部に燈心の燃えた痕跡が黒く残っている。口径12.6cm、底径8.0 cm、器高2.5 cmを計る。

ＳＸ０１出土

蓋（Ｐ１１・Ｐ１２）　Ｐ１１は、中央に高い鈕の付いた灰釉系の蓋である。径10.0cm、器高4.5 cmを計る。Ｐ１２は、内面にかえりをもつ蓋である。鉄釉をリング状に配し、その上に松葉文を描く。径7.8 cm、器高2.5 cmを計る。

色絵埦（Ｗ０５）　椀形の器形に撓高台の付いた小型の色絵埦である。体部外面には草花文等を描く。口径6.4 cm、器高5.1 cm、高台径3.2 cmを計る。

蓋（Ｗ０６）　内面にかえりをもつ染付磁器製の蓋である。天井部から口縁部へゆるやかなふくらみをもって続き、体部外面に呉須で蛸唐草文を描く。水挽ロクロ成形か。径10.2cm、器高2.3 cmを計る。

包含層出土

向付（Ｐ１３）　過半を欠損しているため全容をつかめないが、織部焼の向付が予測される。濃緑の銅緑釉（織部釉）を端部に施し、他域に鉄釉で抽象化された文様を描く。底部には粘土紐をＵ字に曲げて脚とする。２足が遺存するが、本来は３足か。遺存する１辺は10.6cm器高４.８cmを計る。

鉢（Ｐ１４）　黄褐色を呈す黄瀬戸系の大鉢である。外反気味の体部に、外開きの撓高台が付く。口縁部内側には、断面三角形のかえりがめぐる。体部外面には河骨に特有の羽文が刻まれている。底部内面には目痕が確認される。器高15.0cmを計る。

摺鉢（Ｐ１５）　暗赤褐色の胎土を保つ無釉の摺鉢である。胎土中には小砂粒を含む。粘土紐の巻き上げにより成形したものと考えられる。体部は直線的に外上方に開く。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、丸く収める。口縁部外面には明瞭な稜が形成されており、片口が開く。体部内面に篦で１条描の摺目を施している。口縁部付近には窯印が認められる。丹波焼か。

小皿（Ｗ０７）　正方形の４隅を内側へ屈曲させた染付の小皿である。内底面には３種の印文が配されている。印文は、瓢箪印・方印・鼎印の形状を示し、それぞれ内に「子画」「高峯」「天祐」の文字を篆書で刻む。１辺９.０cm、高さ２.６cmを計る。

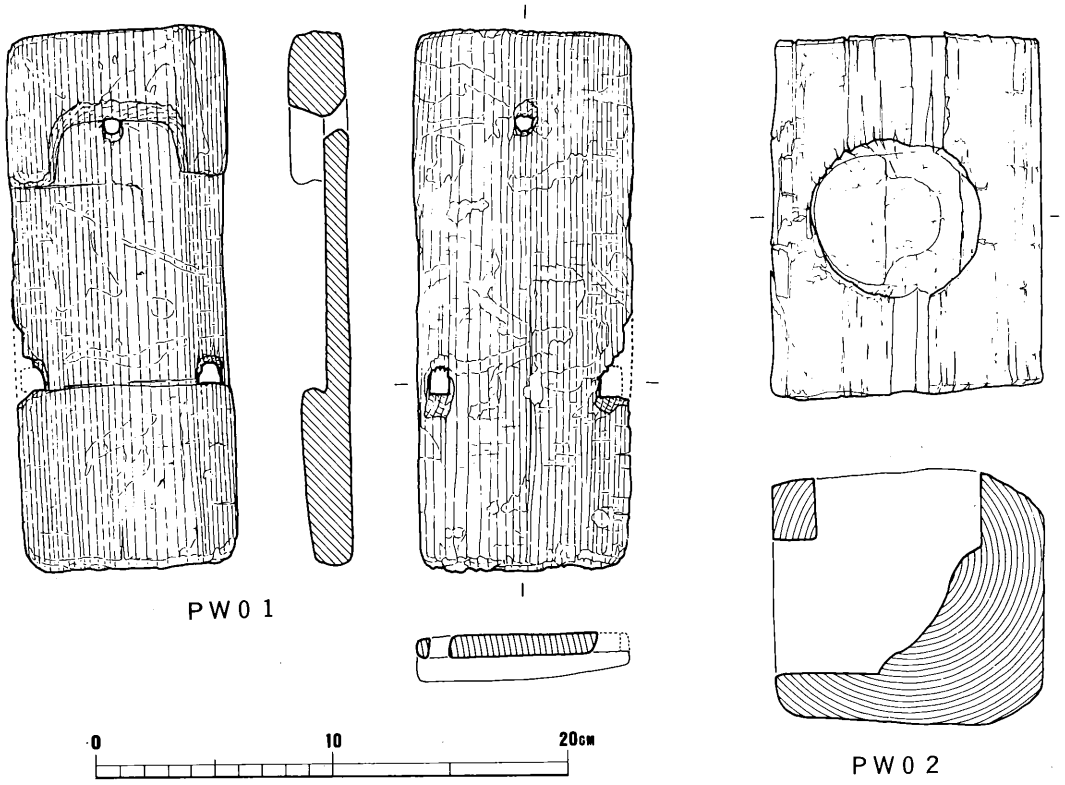


図10．出土木製品実測図

木　製　品

ＳＤ０３より庭下駄、ＳＥ０２より竹樋駒が各１点出土しているので紹介しよう。

庭下駄（ＰＷ０１）　一木造りの下駄で、両歯とも歯として台から独立していない。長さ22、９cm、幅9.2 cm、台の厚さ1.0 cm、歯の厚さ最大1.5 cmを計る。前緒孔は、前歯をコ字状に抉った端部より穿孔する。横緒孔は、後歯に接する。右横緒孔付近が一部欠損しているが、前緒孔を丸く、両横緒孔を四角に穿孔する。歯は良く使用され全体に摩耗しているが、前歯より後歯が、同じく後歯でも右側の摩耗が特に顕著である。

本例のような下駄は、庭下駄又は露地下駄と通称されたもので、茶室の露地の歩行などに用いられたようである。そのために歯が台から独立せず、接地面積を広くして庭をいためることを極力少なくするように配慮している。ところが、接地面積が広いために活動的ではなく、又、長距離の歩行にも耐えられそうにない。静かにそして比較的短い距離を短時間歩行するための特殊な下駄といえよう。

竹樋駒（ＰＷ０２）　竹樋を連結する木製のジョイントつまり駒である。11.9cm×10.8cm、×15.2cmの直方体の隣接する２面に円孔を穿ったものである。円孔は径7.0 cm、深さ3.1 cmのものと、径5.2 cm、深さ4.4 cmのものが直角方向に接続し、両者間は孤状に抉り込まれて連なっている。円孔にそれぞれ竹樋を差し込んで、流れを直角方向に変換していたのであろう。なお、本例のように直角方向に円孔が穿たれている場合には、添水（そうず）つまり蹲踞（つくばい）等で竹筒にたまる水の重みを利用して反転させ快音を楽しむ施設の、竹筒のジョイント部にも使用された可能性が考えられる。

V．考　　察　―― 坪庭の漆喰池について ――

今回の発掘調査によって、漆喰池２例を検出した。こうした漆喰池については、いまだ市外に類例を知らないが、市内では、本例以外にも表御殿跡の発掘調査によって５例、現存する武家屋敷内で１例を知る。いづれも、江戸時代の所産である。「坪庭（つぼにわ）」に造られており、本例の漆喰池もその位置関係などから坪庭に造られたと考えるのが妥当と思われる。以下、坪庭に造られた漆喰池について紹介することにしたいが、その前に坪庭について歴史的にふりかえる事から始めよう。

さて、坪庭の「坪」は、「壷」または「局」などとも書かれ、いづれも仕切られたとか、囲まれた空間を意味する。したがって、坪庭とは、建て物と建て物との間、または建て物と塀などにとり囲まれた狭い空間に造られた庭のことを言う。

坪庭が造られるようになったのは比較的古く、平安時代頃までさかのぼるようである。当時、平安京を中心に貴族の邸宅として、寝殿造りの建て物が建てられたが、寝殿造りでは、寝殿といくつかの対屋（たいや）が左右・前後に並び、そのおのおのを渡廊でつないだため、建て物間に小さな空間ができた。これらの空間を利用して、坪庭が生まれたようである。ただ、寝殿造りにともなう坪庭では、坪庭の他に本庭として大規模な池泉をもつ庭園（寝殿造り系庭園）が寝殿の前に広がっている。だから坪庭は、おもに奥向きの建て物間に、住人が座臥して楽しむ小さな庭として造られた。庭の植栽も本庭と比べるとおおらかで、四季の草木を主体とするものであったようである。例えば、平安京内裏では、后妃などが住んだ後宮を中心に坪（壷）庭が幾つか知られ、藤・梅・梨・桐など草木主体の小さな庭であったようである。それは、当初、それぞれの代表的な草木名を冠して「藤壷」「梅壷」「梨壷」「桐壷」と称されていたと考えられるが、いつしか、それらの坪（壷）庭がある建物の名を指すようになり、後宮の飛香舎は藤壷、凝花舎は梅壷、昭陽舎は梨壷、淑景舎は桐壷などと通称されるようになった。それがさらに転じて、それらの建て物を与えられている后妃などを指すに至った事は、「源氏物語」等平安文学を通じて知られるところでもある。

時は流れ、貴族から武士へと支配形態が変化し、それにともない寝殿造りから書院造りへと建築様式が大きく変わっても、坪庭そのものは、奥向きの建て物間を利用し、住人が座臥して楽しむ草木主体の庭としての命脈を保った。書院造りにおいても、各建て物が雁行状ないしは前後左右に並ぶため、小さな建て物空間が寝殿造りと同様に生起したことにも起因しよう。同時に、坪庭を造る習慣は、中・上級武家屋敷や富裕な町屋へもしだいに普及していった。

以上、坪庭を歴史的に振り返ってみたが、つづいて坪庭内にしつらえた漆喰製の池の類例を順次紹介しよう。冒頭で述べたとおり、いづれも彦根市内で検出又は確認した江戸時代の作例である。

西中学校校内武家屋敷跡例

まず最初に、今回の調査で検出した２例についてまとめることから始めよう。

ＥＸ．１　（図９・ＳＸ０１）

本報告でＳＸ０１と称している漆喰池である。「御城下惣絵図」では、吉田六郎の住んだ上級武家屋敷の東辺部に位置していたと考えられ、石組みの雨落ち溝（おそらくはその横を平行して走る塀が存在していたと考えられる）や建て物によって囲まれた坪庭空間の存在が予期された。そこに漆喰池（ＳＸ０１）が検出されている。ＳＸ０１は、平面が三ツ葉状、強いて言えば草書体の心字形を呈している。池中には、やや北西に偏するように岩島が配され、中央の最深部には、平瓦と桟瓦を三角柱状にたくみに組んで埋置している。上辺の約半分に上蓋を架けており、底部上には玉石が敷かれていた。金魚など鑑賞用小魚のための寝床ではなかったかと考えられる。

ＥＸ．２　（図９・ＳＸ０２）

本報告でＳＸ０２と称している漆喰池である。「御城下惣絵図」では、２代藩主井伊直孝の母の出である印具家の印具寿之介の屋敷に位置していたと考えられる。石組みの雨落ち溝とそれに付随し平行して走る塀や建て物によって囲まれた坪庭空間に、ＳＸ０２は存在している。ＳＸ０２の平面形は隅丸方形で池底も全体に平担な造りをなしており、ＳＸ０１と比べるとシンプルである点が留意される。池の南隅に偏して埋甕が１つ確認される。

こうした甕を埋め込む要因として、ＥＸ．１のように金魚など鑑賞用小魚のための寝床と考えられる他、水草の植込みの用途も考えられる。両者とも、その機能を発揮するには、水面下0.3 m程度が最良のようであり、本例や次のＥＸ．３など水面下のレベルが復元される例は、概ねこの数値に齟齬しない。ただ、ＥＸ．１の瓦組みと同一の機能を有していたと考えると、鑑賞用小魚のための寝床であった可能性が高い。

表御殿跡例

つづいて、彦根城内表御殿跡から検出された漆喰池を紹介することにしよう。表御殿は、江戸時代に彦根藩が政務をとり、あわせて藩主などが日常生活を営む、書院造りの建て物である。この御殿には、御座之御間や御茶所などに面して、大規模な池泉の他、築山・数寄屋・待合などによって構成される庭園が広がっている。そして、奥向きの建て物間を中心に、幾つもの坪庭が造られている。当時の表御殿の各坪庭を描いた絵図をみると、やはり四季の草木を主体としたものである。そして、発掘調査の結果、坪庭の内３ケ所５例の漆喰池が検出された。

ＥＸ．３　（図11のＡ、図12）

藩主などがくつろぐ奥向きの御座間や御亭（おちん）に面した坪庭にある。漆喰池は、長軸3.7 m、短軸最大1.6 m、最深部0.4 mの瓢箪形を呈し、瓢箪のくびれ付近に漆喰で円形の中島２島を造り出している。最も深くなる箇所には甕が埋め込まれている。ＥＸ．２に同じく金魚など鑑賞用小魚のための寝床、あるいは水草の植込みの用途が考えられる。

漆喰池の壁面には、図示したように入・排水のための円孔が各１穴ずつ穿たれている。円孔は径７cm程度を計り、竹製の管が挿入されていたものと予測される。水は、遠く油掛口御門近くの外堀（現在の城東小学校裏彦根警察署武道場付近）にある元桝から、元桝の噴出水圧を利用し樋で導いていたことが、古絵図などより知られる。それによると、道路下を走る幹線系の

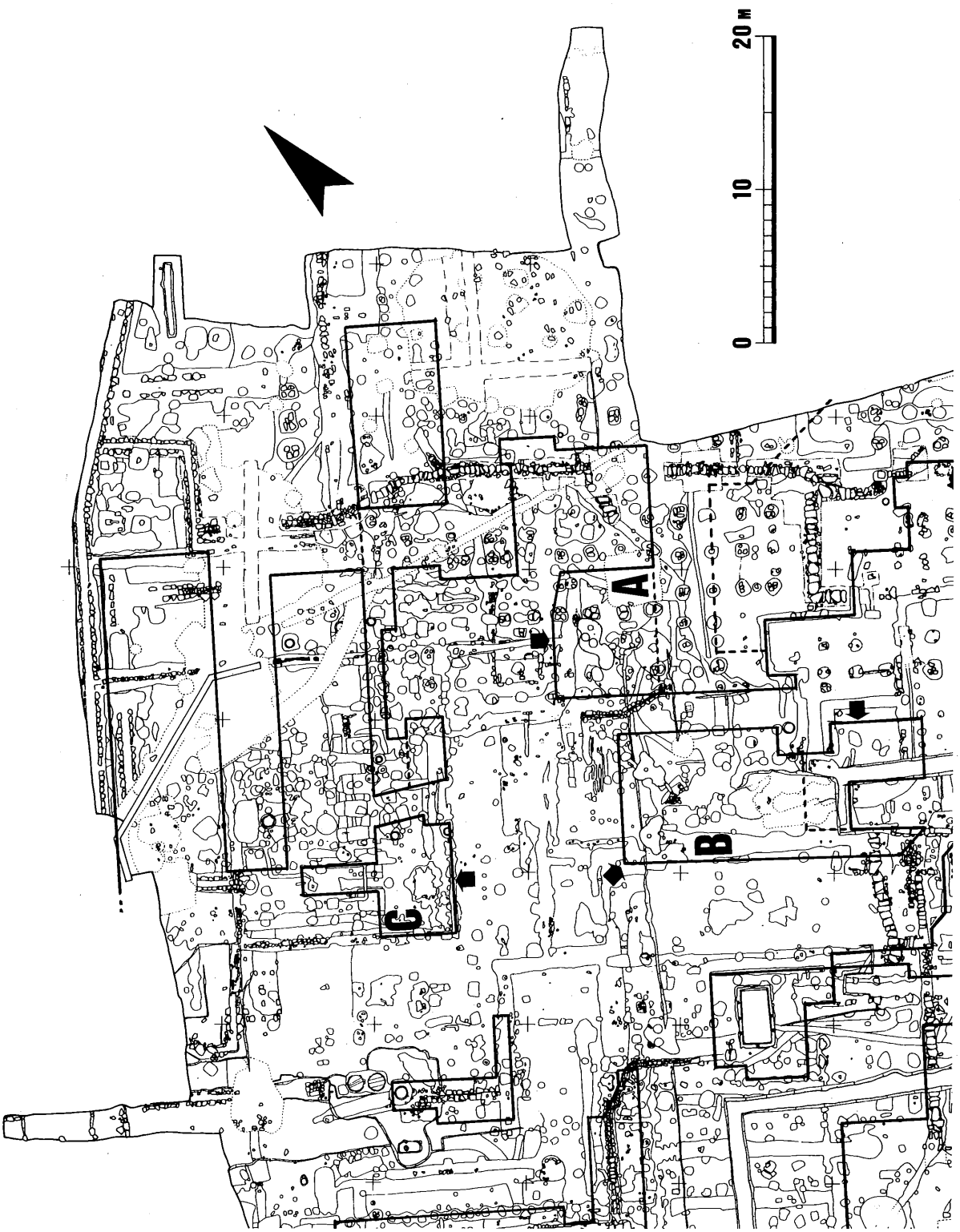


図11．彦根城表御殿跡（部分）坪庭位置図

（矢印は坪庭の主たる観点を示す。）

樋としては石樋・木樋・竹樋そして新しく瓦樋が知られ、各屋敷へ分水された支線系の樋は、径の小さい竹樋などが主体を占めたようである。竹樋の場合、本報告のＳＸ０３のような円形の漆喰桝やＰＷ０２の木製駒を経て屋敷内に適宜細分水され、その一条が本例の漆喰池に送水されていたものと予想される。

なお、坪庭を描いた古絵図をみると、桜や桃の木などは植えられているが、池は表現されていない。漆喰池の存在しない時期に描かれたものであろうか。

ＥＸ．４　（図11のＢ、図13）

奥向きの御客座敷や高御廊下に挟まれた坪庭内に位置する。小規模な２基の漆喰池を対称として、その南東に比較的大型の漆喰池が存在している。小規模な２基は、ＥＸ．１に似た三ツ葉状の平面形を呈している。両者とも最も深くなる中央付近に甕を埋め込んでいる。やはり、鑑賞用小魚のための寝床ないしは水草の植込みの用途に供されていたのであろう。南東方向の漆喰池は、後世の撹乱が著しくて全体の形状を把握しにくいが、細長くて底部の平担な比較的シンプルな造りであったと予想される。

これら３基の漆喰池は、入排水路によって相互に複雑につながっている（図13の矢印参照）。まず、北東方向から導かれてきた水は、小規模な２基の漆喰池の内北東側の池の直前で２方向に分水される。そして、一方は北東側の小池に、他方は南東の大池にそれぞれ流れ込む。この水路は、断面観察において円形の管を埋設していたことが判明しており、おそらく竹樋が施設されていたのであろう。水路内には粘土塊が部分的に残っており、竹樋に粘土を巻いて漏水を

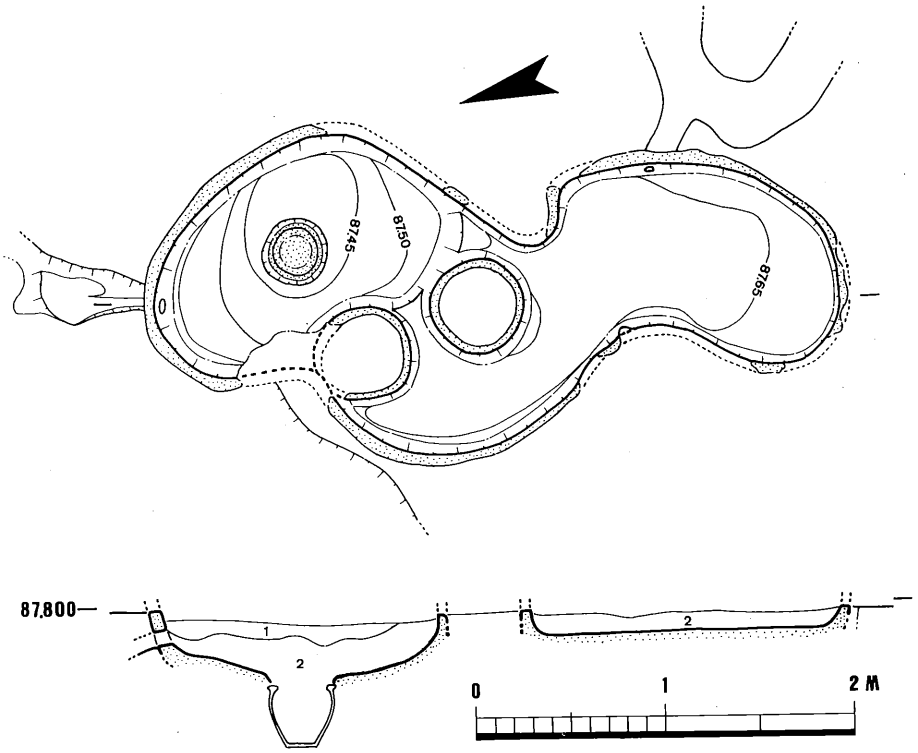


図12．ＥＸ．３漆喰池実測図

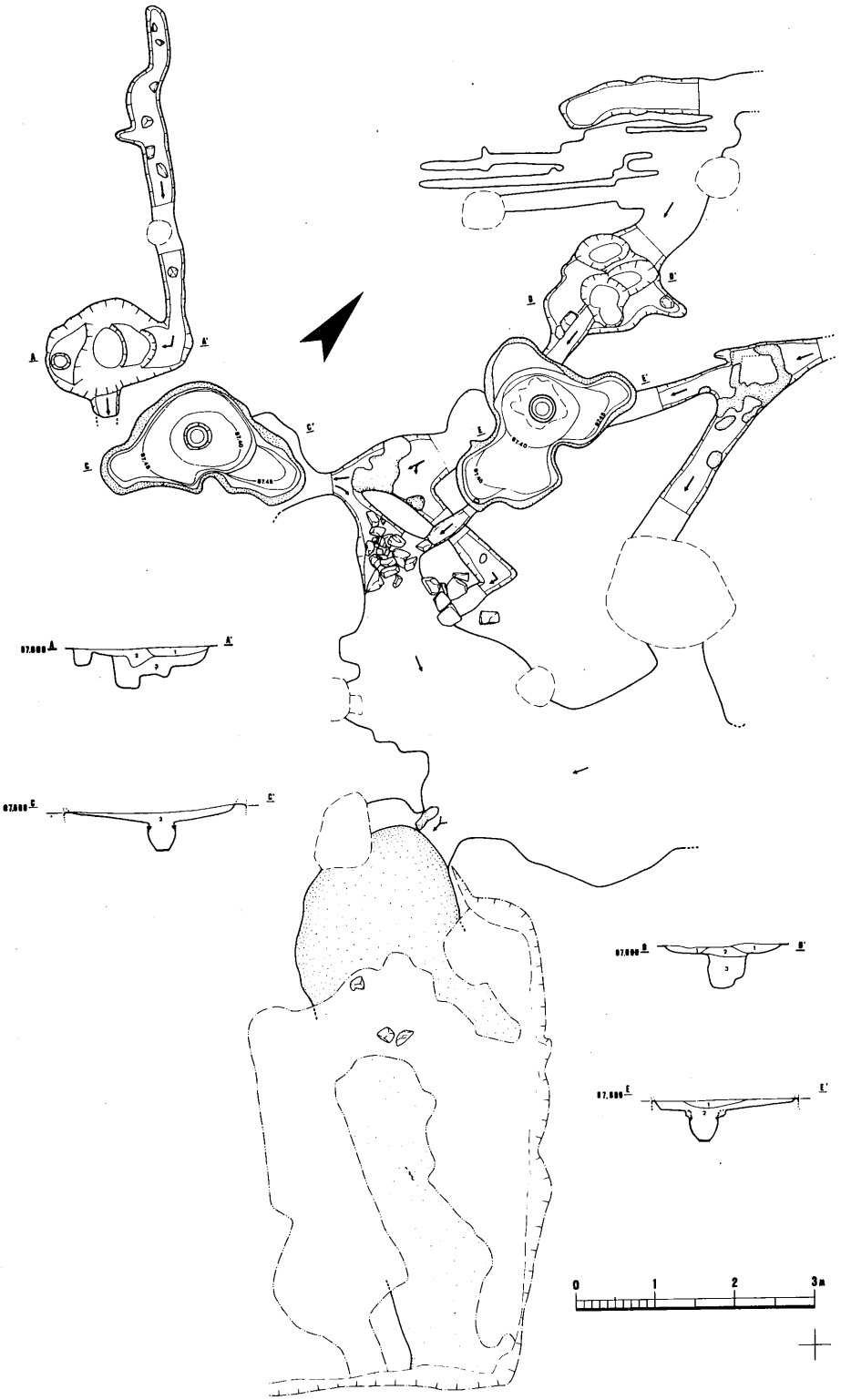


図13．ＥＸ．４漆喰池実測図

防いでいたものと予想される。分水点には、粘土塊が30～40㎝程度の方形にめぐっており、木製の駒によって分水していたと考えられた。北東側の小池に入った水は、場所の異なる２孔から排水されていたようである。その１孔は現存しており、孔を出て曲折しながら南東の大池に向かう。孔を出た当初は竹樋であったと予想されるが、途中から多量の角礫に包まれており、石組み暗渠ないしは礫敷きのめくら暗渠に変ったとも考えられる。一方、他の孔より排水された水は、途中で木製駒様のもので分水されて、北西側の小池と南東の大池へ向かう。北西の小池へは竹樋で、南東の大池へは竹樋から石組み暗渠又は礫敷きのめくら暗渠に変様した可能性がある。北西側の小池へ入った水は、再び隣接する排水口によって外へ流出し、南東の大池へ向かう。やはり、途中で竹樋から石組み暗渠又は礫敷きのめくら暗渠風の施設に変換したようである。多方向から南東の大池へ向かった水は、しだいに集水され、終に１条にまとめられて大池に入っている。以上、３基の入排水路について述べたが、分水のなされかたが過度に複雑であり、ある段階で一部流路変えを行なった可能性も考えられる。

なお、これらの竹樋を主体とする導水法とは別に、雨水を使って補助給水を行なっていたのではないかと思われる遺構が、小規模な２基の池にそれぞれ付設されている。両遺構とも良く似た形態を保っており、同様の機能がうかがえる。まず、御客座敷などの建て物下を、めくら暗渠を伝って流下してきた雨水は、各池の直前で深さ50ｍｃ余の土壙に一度貯えられる。この土壙は、現況では素掘りのものだが、かつては甕等保水性の良い大型容器を埋設していた可能性がある。土壙で沈殿濾過された上水は、オーバーフロー気味に両池にそれぞれ流入していたようである。

当坪庭を描いた古絵図には、梅や草花などが植えられているものの、池が表現されていない。ＥＸ．３と同様、漆喰池の存在しない時期に描かれたものであろうか。

ＥＸ．５　（図11のＣ、図14）

奥向きの御客座敷の棟と局の棟に挟まれ、両棟を結ぶ廊下などによって画された坪庭内に位置している。全体に遺存状態が不良であるため、形状を把握し難い。最も深くなる中央付近に甕を１つ

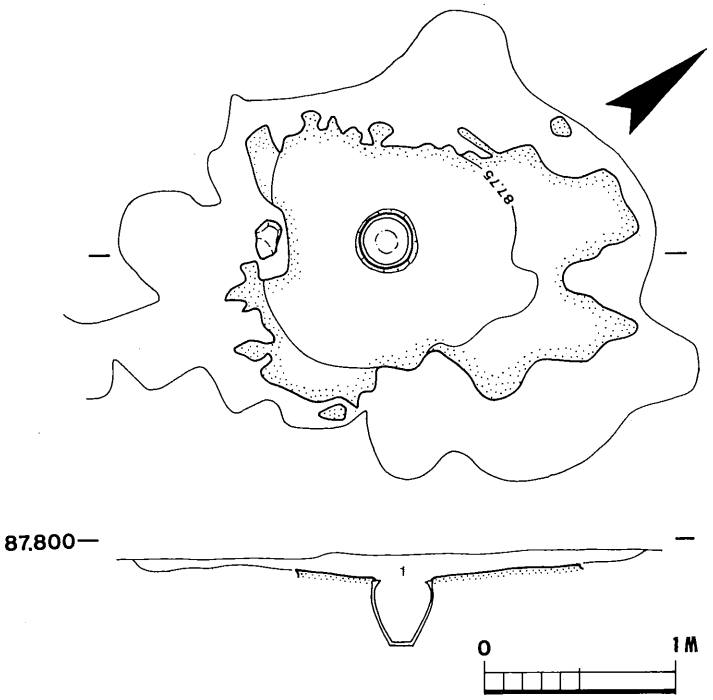


図14．ＥＸ．５漆喰池実測図

埋め込んでいる。これまで述べてきたと同様の用途が考えられよう。入排水路についても明らかでないが、わずかに北東及び南西方向に溝状のよごれが認められることから、いづれかが入水路、他が排水路であった可能性が考えられる。

写真２．市内現存の武家屋敷内坪庭漆喰池

坪庭の古絵図をみると、この坪庭のみ池が描かれている。ただ、それが漆喰池であるかどうかについては確定できない。古絵図の池には、池の周囲に景石が６個めぐっており、池上のあつらえの棚には、藤が蔓をからませている様が知られる。

市内現存の武家屋敷例

ＥＸ．６　（写真２）

最後に、市内に現存する武家屋敷で確認した坪庭内の漆喰池について紹介することにしよう。この武家屋敷は、第３郭の中堀に面した位置を占め、石高350石の中級武家屋敷である。屋敷内の２ケ所に坪庭が現存しているが、漆喰池は門を入ってすぐ右側の表向きの坪庭内にある。塀や座敷・雪隠などによって画された小さな坪庭である。中堀側に面して低い築山が築かれており、築山の中腹に鏡石を据えた枯滝口がある。枯滝口から離れ座敷に向かって作られた玉砂利による流れは、ほどなく池泉に入る。現在、池泉に水はないが、かつては満々と水をたたえていたものと考えられ、水漏れを防ぐように池底から護岸の石組みに至るまで漆喰が塗り込められていた。しかも、最も深い箇所には写真のような漆喰製の桝が作られている。30×40cm、深さ40cm程度を計る。これまで見てきた瓦組みや甕と同様の機能が予測され、金魚等鑑賞用小魚の寝床ないしは水草の植込みの用途が想起されよう。なお、この坪庭は通路に変わったため現存しない。

以上、彦根市内で確認した６ケ所の坪庭内８例の漆喰池について紹介した。これらの漆喰池をみると、幾つかの共有する要素が見い出せそうである。その１つは、ＥＸ．１やＥＸ．３で検出した石製・漆喰製の池中にしつらえられた中島である。又、遺存状態が不良なため一部でしか検出していないものの、竹樋によって導水する入排水路がある。そして何よりも池の最も深くなる箇所に埋め込まれた、ＥＸ．１の瓦組み、ＥＸ．２～ＥＸ．５の甕、ＥＸ．６の漆喰桝が存在した。今後、漆喰池の発掘・確認例が増加するとともに、類例も増すものと予測される。ただ、前２者つまり中島や入排水路については、規模を拡大したものが本庭にも存在す

るのに対し、後者は坪庭漆喰池に普遍的に存在したにもかかわらず、本庭には余り見ることのできないものである。本庭が格式を重んじる大庭園であるのに対し、坪庭はそのことに余り左右されない、むしろ日常生活の中で住人が座臥して楽しむことに主眼の置かれた小さな庭であった。後者が、金魚などの小魚あるいは水草を鑑賞し楽しむための工夫であることを想起すると、坪庭に特徴的な要素ということができるかもしれない。

最後に、漆喰池の素材をなす漆喰について若干ふれておこう。漆喰は、石灰に砂や粘土そしてにがり液を加えて捏ねたものである。例えば、表御殿跡能舞台下で検出した漆喰製の共鳴装置（槽）について、奈良国立文化財研究所保存化学室室長沢田正昭氏に漆喰の成分分析をお願いしたところ、山砂・砂利・石灰をおよそ５：３：２の比率で混合し、そこへにがり液を加えたものであるという結果を頂戴している。実際の復元作業では、漆喰を塗り足しては叩き締める作業を幾度か繰り返した後、仕上げとして一際念入りに叩く。そのことによって荒い成分はしだいに沈着し、細い粒子のものや水分が浮上してくる。その頃合いを見計って、コテで丁寧になで上げると、あたかも白壁のごとき仕上がり具合になるようである。

こうした漆喰製の遺構は、彦根市内江戸期の発掘調査によって数多く知られる。種別ごとに列挙すると、まず、水回りの細工として台所や玄関、便所、茶室の水屋、湯殿の各床などいわゆるタタキと称される箇所、それに縁下や犬走りなどがあり、入排水に関連するものとして、樋の桝や多様な排水管がある。石垣の間隙を埋めるために漆喰を使った例もある。又、先述の能舞台下の共鳴装置（槽）や屋外の防火用水槽、井戸の井筒があり、庭園に関連するものとしては、今回紹介した池の他、池に至る遣水（やりみず）の底、露地、柴垣の基礎部分にも使用されている。中には、例えば茶室の縁下など、漆喰に赤色顔料（ベンガラ）を加えて奇をてらってもいる。このようにみてくると、当時、漆喰は現代のコンクリートにも似た使用頻度にあったことが窺い知れよう。

付　　章

1．はじめに

彦根城の古図によれば、その内曲輪の武家屋敷は実に詳しく記されているが、その内容は屋敷の区画であって、建物配置に関する記録はない。又それだけに当時の武家社会の生活様式は不明のまま今日に至っている。

然るに今回、市立西中学校校舎増築に伴う事前発掘調査が市教育委員会の手によって進められ、県教育委員会文化財保護課の指導の下に発掘調査団が組織され、昭和54年９月５日より開始、現場での発掘調査は約１ヶ月を要した。その間、当時の建物遺構及びそれに付随する建物の基礎並に、遺物の出土を見たが、何分にも発掘調査対象区域は、元体育館が建てられていた所で、当時の遺構の大半は殆ど破壊されており残念乍ら当時の武家屋敷の実態を確認することが出来なかった。ともあれ、この調査を機会にして今後、彦根城及び市内において種々の開発、原形改造等の工事に先立って調査が行われることの先駆になり得たことの意義は深い。

今回の調査にあたって、県・市両当局並に発掘調査に従事された関係者、地元の方々に対し感謝の意を表する次第である。　　（発掘調査団長　江南　洋）

2．調査の経過

今回の調査は旧校舎老朽化に伴なう新校舎の増築等によるもので、特別史跡彦根城跡の現状変更にかかわる事前調査であった。このため調査は建築設計計画に基き、必要個所のみ一部はトレンチ、一部は面的に実施した。設計によると、既建築の新校舎の北（第１地区）は増築計画であったため面的に調査を実施した。一方、既新校舎の南側の第２地区については、付属建物の建築予定であったため、布基礎部分のみＨ字状にトレンチを設けた。

なお、調査に際しては、時間的制約と人的制約から、市教育委員会の総務課、社会教育課の全面的な協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

3．遺　　構

〈第１地区〉

面的に調査を実施したＡ区については、旧校舎の跡地であり上層は撹乱が激しかった。特に建築廃材が多く、一部焼土等も含まれていた。

撹乱層の除去後、旧整地層と思われる部分を検出し、精査の結果、束柱礎石または根石と思える割石８ヶ所と、抜取穴のような径0.5ｍ前後の浅い皿状ピットが３ヶ所確認できた。礎石列と皿状ピット列は、いづれもＮ－40°－Ｗ近くの方位を持つが、若干振度が異なり、別棟の可能性が強い。礎石はおおむね20㎝角で、５～７㎝の厚さをもつ火崗岩質であり、柱間寸法は略東西方向が3.25ｍを、略南東方向は2.0ｍを公約数に持つ割り付けで建てられていたようである。ピット列についても、略南北方向で２ｍ×５間分となっていた。なお、この柱列は、中堀

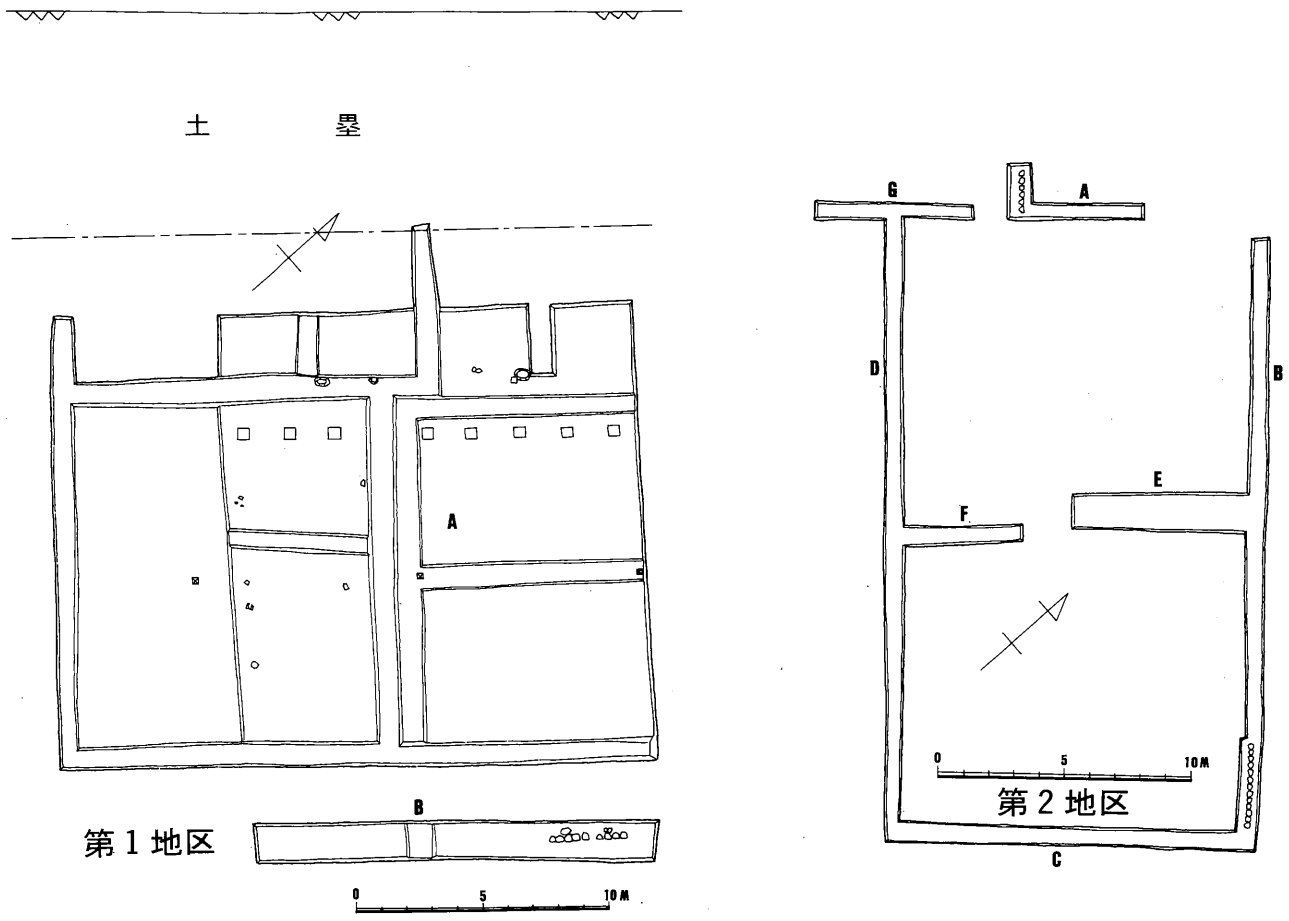


図15. 付章関係遺構全図

に面する土塁の法尻からは６ｍの距離を持って平行関係にあった。

Ａ区での遺構は以上の束柱礎石または根石および抜取穴と思えるもの以外は検出できなかったため、中央に補足トレンチを設け、さらに下層の確認を実施したところ、下層は種々の土砂による荒いレンズ状堆積となり、盛土造成であることが確認できた。また、さらに下層は浜砂層が続き湧水が認められた。

次に旧校舎と新校舎間で旧地表の確認を目的に設けたＢトレンチでは、側溝痕と思える横１段積みの石列を延長3.2ｍ分検出できた。用材は花崗岩の割石で１辺30㎝、高さ20㎝前後の三角柱状のものの１面を揃て、内堀側に面を持たせて並べられていた。ただ遺存状態では横１段であるが、一部に裏込めらしき石があることから、さらに上段があったと考えられる。この場合、現石列の天場でも、Ａトレンチで検出した束柱礎石とは30㎝以上のレベル差を持ち高いことから、あるいは屋敷地の外郭を巡る、腰に石積みを施した塀の地覆列かとも考えられた。

〈第２地区〉

当該区は、先にも記したように設計図に合わせて布基礎部分のみの調査を実施した。ここでは、ＡトレンチとＢトレンチで、それぞれ側溝痕の石列を検出した他は、Ｄトレンチで花崗岩の割り石を２個検出したのみである。

Ａトレンチの石列は、第１地区Ｂトレンチと同様の用材で略東西方向のものであり、北側に面を持ち、延長1.6m分が検出された。特に石列の前面側は泥が多く、桟瓦が集中していたことから、対岸側の石列は検出できなかったが、側溝の側石と考えられた。

次にＢトレンチでの石列は、Ａトレンチと同様の方位を持ち、延長3.4m分が検出された。ただこの石列は、既検出の石列とは様相を異にし、平面的に面を持っており、側溝の底石列と考えられた。現列の南端からさらに南へ４ｍで内堀に面した道路敷に至ることから、屋敷内より中堀側への排水機能を有していたと考えられる。

Ｄトレンチで検出された２個の石材は束石に適した石材であったが、その検出状況から判断すると原位置を有していないため、何ら判断することはできなかった。

４．遺　物

今回の調査地では、大部分の上層が撹乱層と現中学校建設時の整地層で、遺物の主たるものは桟瓦片であった。また、陶磁器類としては伊万里瓶子片や清水焼の碗等があったのみで、他は明治以降のものであった。

５．まとめ

今回の調査地は、彦根城の中堀と内堀に挟まれた内曲輪部分の一画で、付近は井伊藩の重臣屋敷街であり、城中でもある。しかし、屋敷街であると云うことは判明しているものの、それ以上のこと、例えば各屋敷内の具体的な建物配置等については、ほとんど具体的な資料はなく、唯一、享保３（1718）年の印具氏へ井伊直興の辰姫が嫁した際に増改築した平面図があるのみで、実態は明らかでなかった。

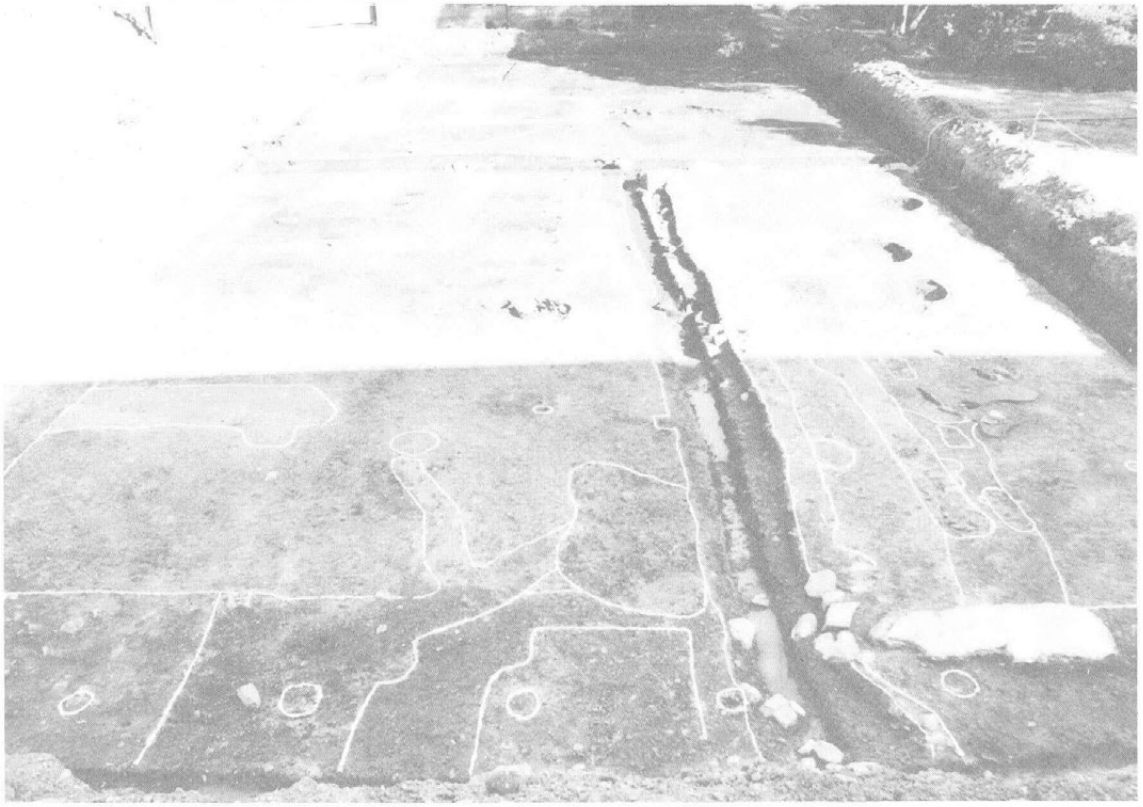
今回の調査は、このような現実の中で、若干なりとも資料を集積せんがためにも実施したものである。幕末頃、調査の第１地区には天野康文が、第２地区には酒井右膳が居していたことが明らかであるが、今回の調査結果から見て、いづれの石列も屋敷内での排水溝にかかわるもののみと考えられる。

最後に、今回の調査での石列の遺存状況は、若干不自然な状況にあった。つまり側溝としても対岸側の石列はなく、建物の地覆や、縁石としても前後の距離がないことである。このことは、解体撤去に際して意識的に部分を残した可能性もある。この様な例は、まったく時代・場所を異にするが、難波宮跡でも見られ、暗渠の一部、基壇端等が残されていた。何か共通した意識の中で残されたようにも思える。

（近藤　滋）

図　　版

1．特別教室棟区遺構全景（南西より）



2．管理棟区遺構全景（北西より）

2．雨落ち溝・ＳＤ０４検出状況（南西より）

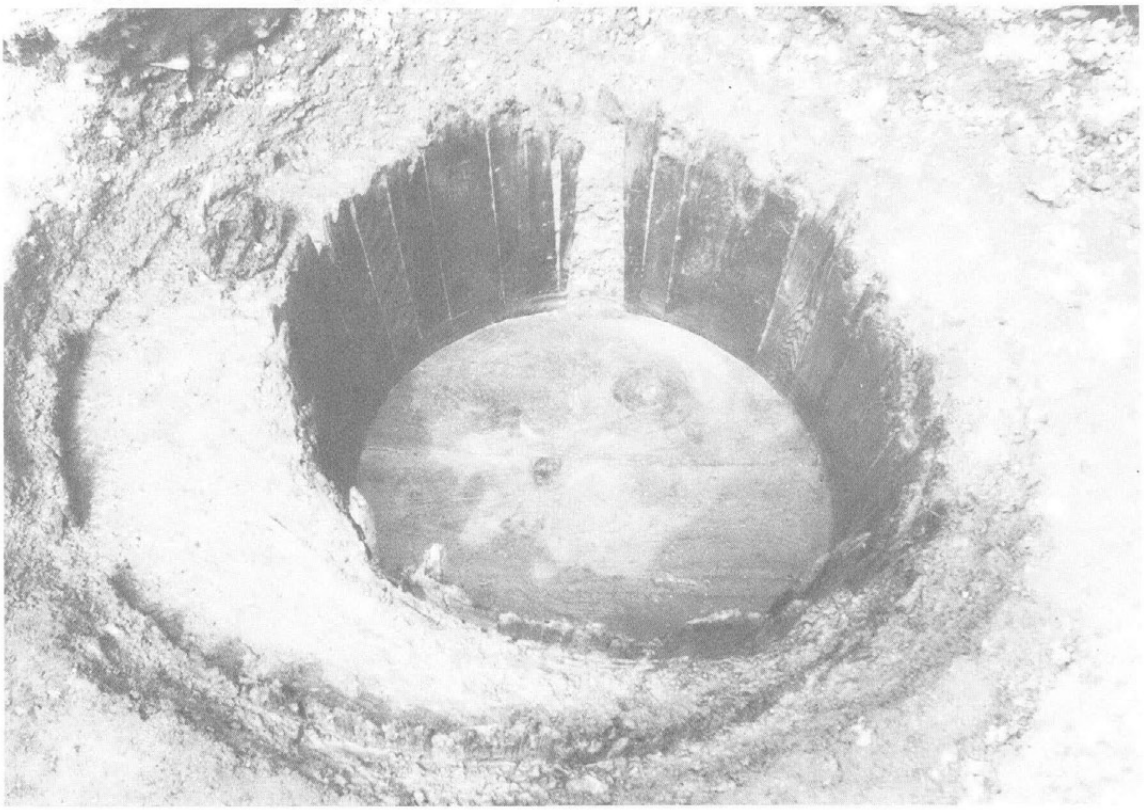
1．雨落ち溝・ＳＤ０３検出状況（南東より）

1．井戸・ＳＥ０１検出状況（北東より）

2．井戸・ＳＥ０２検出状況（北東より）

PL.4

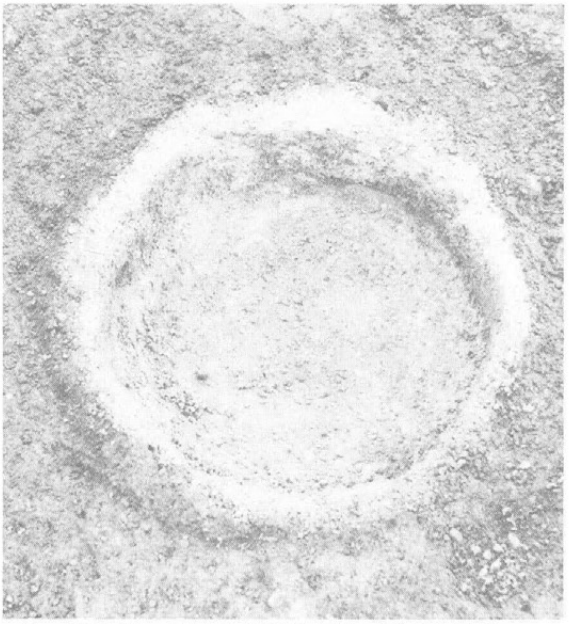
1．井戸・ＳＥ０３検出状況（南東より）



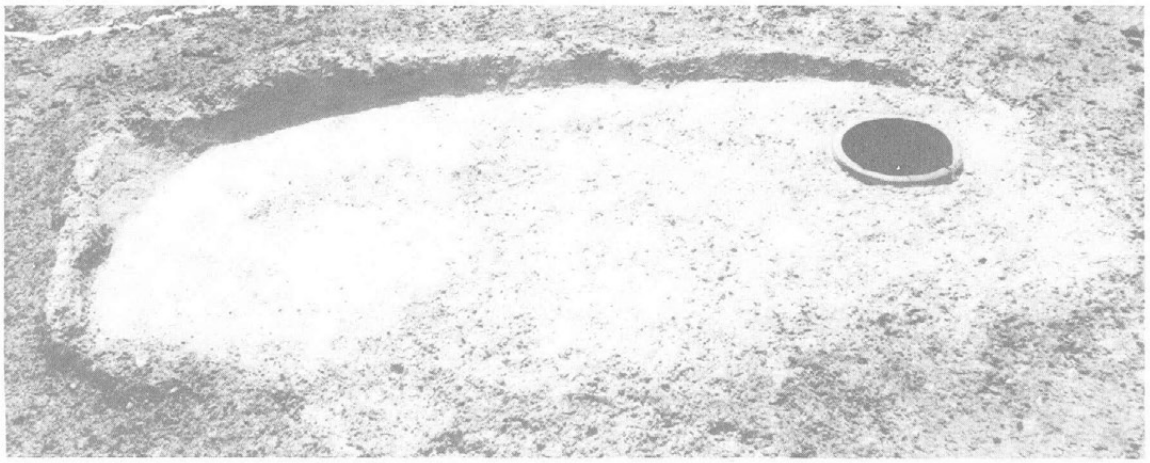
2．便槽・ＳＬ０１検出状況（南西より）

1．漆喰池・ＳＸ０１検出状況（南西より）

2．漆喰池・ＳＸ０１内鑑賞用小魚の寝床

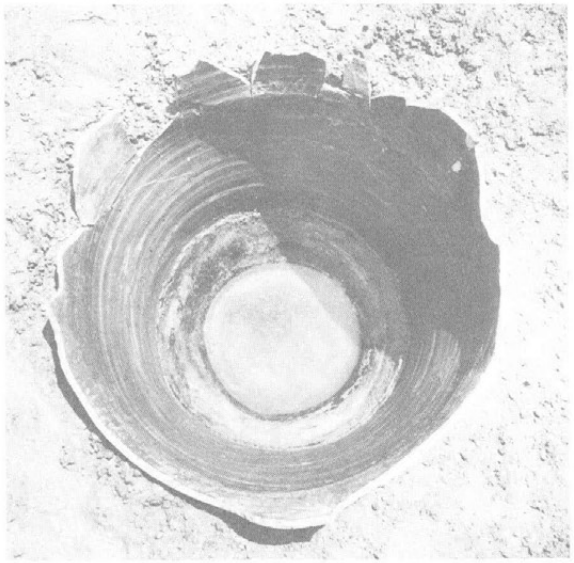


3．漆喰桝・ＳＸ０３検出状況（北東より）



1．漆喰池・ＳＸ０２検出状況（北西より）

2．犬走り・ＳＸ０４検出状況（南東より）

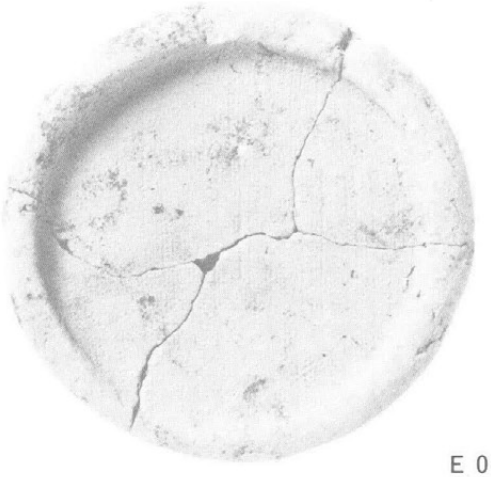


3．埋甕・ＳＰ０１検出状況（北西より）

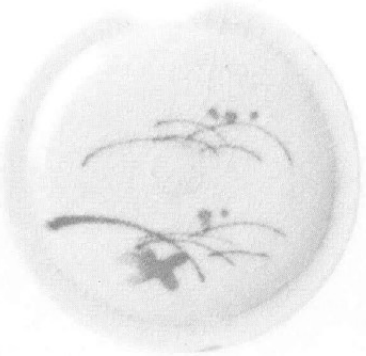
4．埋甕・ＳＰ０２検出状況（北東より）

P01

P02



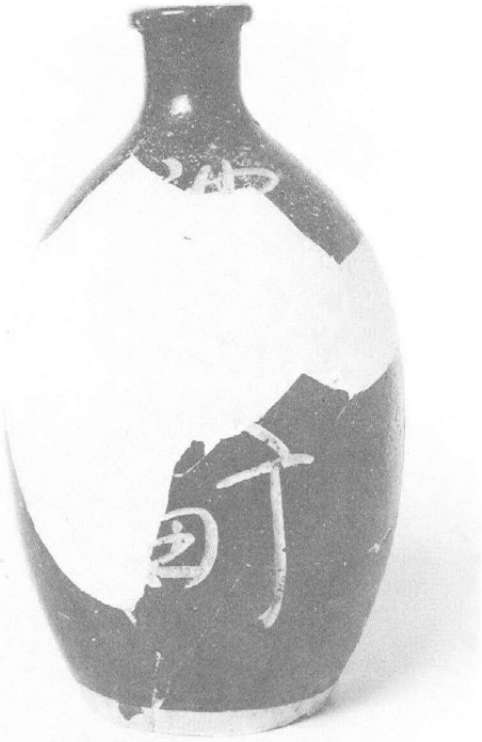
E01



P03

P04

PL. 8



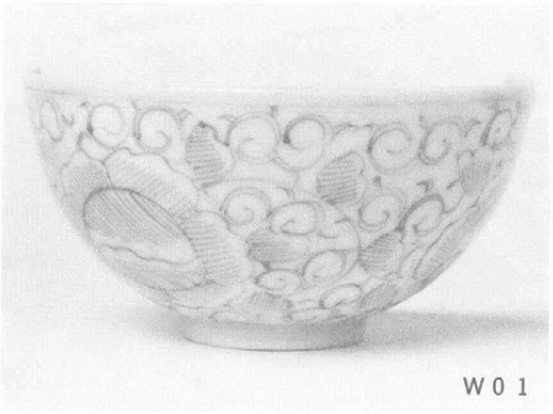
P06

P05

P07

P10

P08

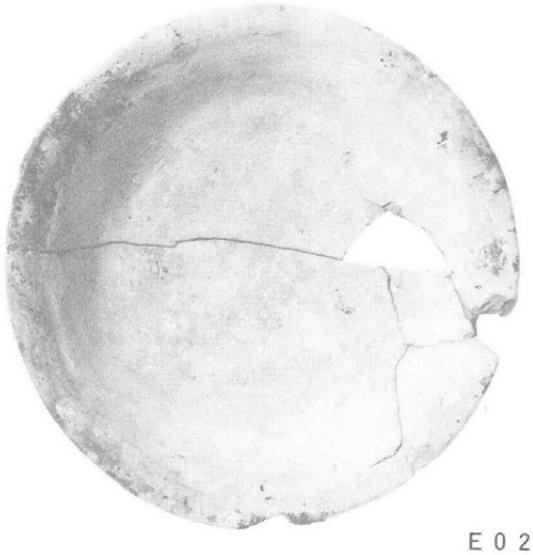


W01

P09

W02

W03

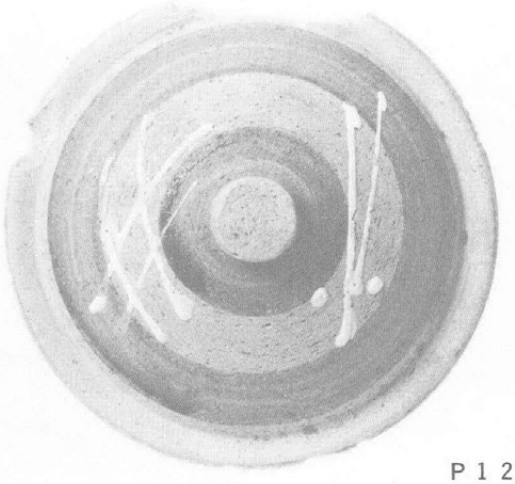


E02

W05

PL. 10

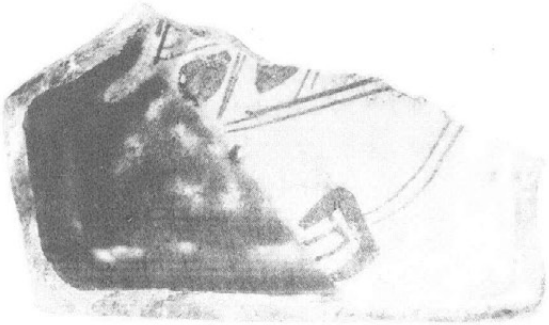
P11

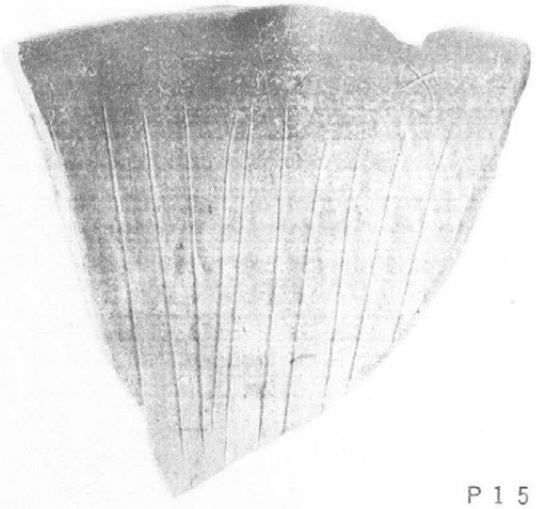


P12

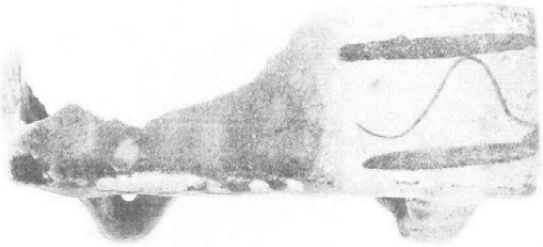
W04

W06



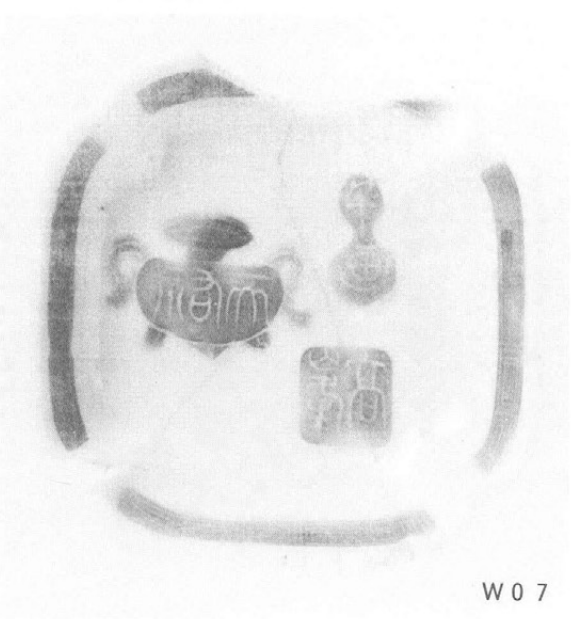


P15



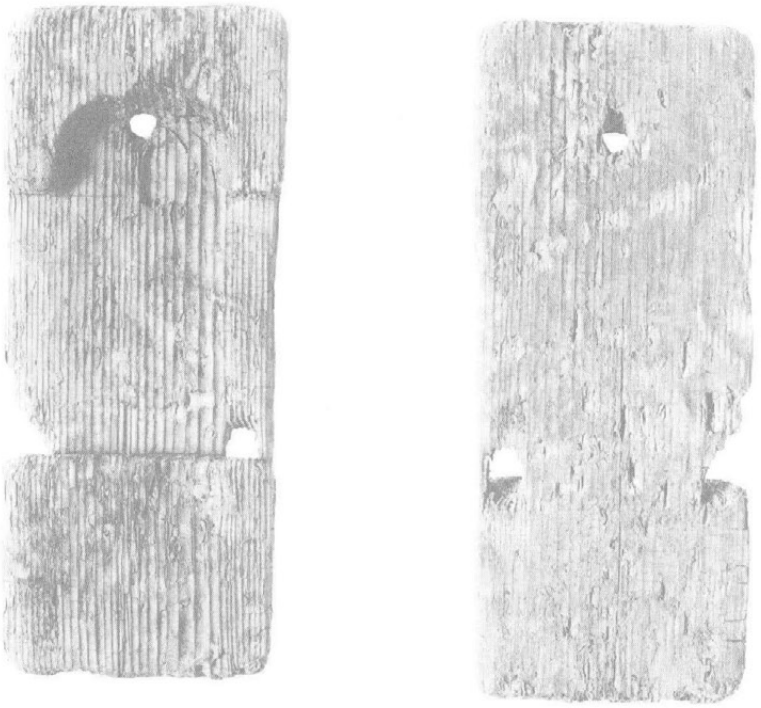
P13

P14

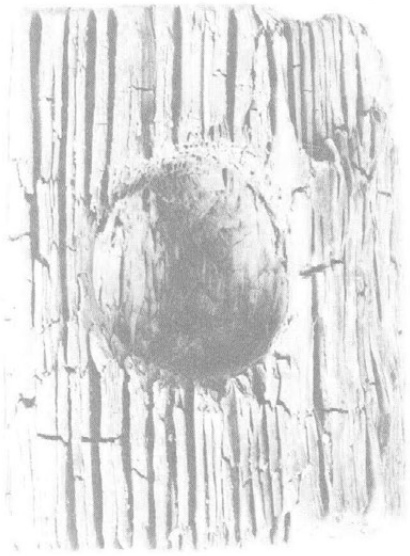


W07

PL. 12



PW01



PW02

彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

── 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 ──

1985

編　集　彦根市教育委員会

発　行　彦根市教育委員会

印　刷　サンライズ印刷株式会社